KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

関西学院大学手話言語研究センター

2020年度　事業報告書

（2020年4月1日～2021年3月31日）

◆第3回　手話学コロキアム
◆文化イベント

関西学院大学手話言語研究センター

目　次

◆第 3 回手話学コロキアム：2020 年 9 月 27 日（日）オンライン開催　1

開会の辞　松岡　克尚　3

第一部　講演

講演 1　「手話獲得研究の方法論　武居　渡　5
－ビデオデータを科学的に分析するとはー」

講演 2　「ろう重複障害の子どもたちの手話をどう捉えるか　松﨑　丈　15
－ろう学校でのフィールドワークー」

第二部　ワークショップ　武居　渡　松﨑　丈　23

閉会の辞　森本　郁代　26

登壇者紹介　27

◆文化イベント：2020 年 11 月 7 日（土）オンライン開催　29
Zoom ウェビナーde デフアート　～表象されるろう者～

開会の辞　松岡　克尚　31

講演 1　「デフアートとは」　乘富　秀人　33

講演 2　「デフアートの社会への効果」　門　秀彦　37

講演 3　「絵画における表象」　田中　久美子　41

座談会　乘富　秀人　門　秀彦　田中　久美子　49

モデレーター：　塚田　幸光

閉会の辞　平　英司　61

登壇者紹介　62

第３回手話学コロキアム

開催日時：2020 年 9 月 27 日（日）オンライン開催
受付開始：13:45
開　　会：14:00
閉　　会：16:30
参 加 者：（第一部）61 名　（第二部）18 名

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY SIGN LANGUAGE RESEARCH CENTER

主催：関西学院大学手話言語研究センター

第3回 2020年度

手話学コロキアム

参加費無料

日時 2020年9月27日(日)
14:00～16:30（13:45～入室可能）

開催方法 オンラインイベント zoom ウェビナー/ミーティング

〆切 9/20(日)

定員 第1部 先着60名 / 第2部 先着20名

第1部 14:00～15:20

手話獲得研究の方法論
－ビデオデータを科学的に分析するとは－

講師 武居 渡 氏
（金沢大学教授）

専門分野：
ろう児の手話獲得過程・手話評価法開発、不就学ろう者のホームサイン

ろう重複障害の子どもたちの手話をどう捉えるか
－ろう学校でのフィールドワーク－

講師 松﨑 丈 氏
（宮城教育大学准教授）

専門分野：
ろう、難聴、ろう重複障害におけるコミュニケーションの諸問題の分析と問題解決の提案

第2部 15:35～16:30

ワークショップ
手話話者グループ、日本語話者グループに分かれ、各講師とディスカッションを行ないます。

【対 象】手話に関する研究をしてみたい方、手話使用者、手話学習者
【準備物】通信機器、インターネット環境が必要です。また第２部では、ウェブカメラ、マイクも必要になります。
【お申込方法】右記QRコードまたはURLよりお申込みください。https://onl.tw/1TRMBUp
【情報保障】手話通訳、要約筆記が付きます。
【お問い合わせ先】関西学院大学　手話言語研究センター　FAX：0798-54-7014　TEL:0798-54-7013
Mail:slrcenter@kwansei.ac.jp　URL: https://www.kwansei.ac.jp/c_shuwa/

開会の辞

松岡　克尚

○松岡　皆様、こんにちは。本日は手話学コロキアムへ、ようこそお越し下さいました。

私は関西学院大学手話言語研究センターの松岡と申します。どうぞよろしくお願いします。主催者を代表しまして、一言、私のほうからご挨拶申し上げます。

今年度は新型コロナウイルスの影響のために、皆様の日常生活、社会生活に様々な支障が生じたと思います。私どもの手話言語研究センターにとっても、当初の計画に沿った活動の多くが中止に追い込まれ、十分な活動を果たせているとは言えない状況でした。

ようやく、この手話学コロキアムの開催によって、オンラインではありますが当初の計画に沿った取り組みが展開できるようになったところです。

さて、この手話学コロキアムですが、昨年度より始めたもので、手話に関心のある方、特にネイティブサイナーの方に手話言語学、あるいは手話を取り巻く様々な学問について研究するための楽しみを知っていただき、いずれは自分で研究してみたいと思ってもらえることを狙いにしています。もしかしたら、手話学コロキアムで研究に関心を持ってくださった方の中から、未来の研究者が育っていくかもしれません。そうしたことを願い、まずは研究の魅力に触れていただくことを目的にしています。

今年度は通算で第３回目の手話学コロキアムになりますが、本日は２部構成として、まず、第一部ではお二人の研究者によりご自分のご専門について語っていただくことを通して手話研究の魅力についてのメッセージを頂戴できればと思います。

まず、金沢大学の武居先生からは、手話獲得研究の方法論、そして、宮城教育大学の松﨑先生より、ろう重複障害の子どもたちの手話をどう捉えるかについて、それぞれお話をしていただきます。お忙しい中、本日、お話しいただくことになる武居先生、松﨑先生には、心よりお礼を申し上げます。お二人の研究テーマ、タイトルを見るだけでも、わくわくしてこないでしょうか？是非とも、研究の面白さを実感していただければと思います。

そして、第二部ではワークショップで講師のお二人にも入っていただき、ディスカッションをしていきます。質問があれば是非ともお願いできれば幸いです。

本年度はコロナのために、対面ではなく、オンラインでの実施になりました。Zoomのウェビナーを使っての実施になりますが、実は、このウェビナーというものを使うのは、

私どもも今回が初めてになります。慣れていないので、色々うまくいかないところがあるかもしれませんが、どうか最後まで楽しんでいただければと思います。簡単でありますが、以上をもって、私からのご挨拶といたします。

ご清聴ありがとうございました。

【第一部】講演１

「手話獲得研究の方法論 －ビデオデータを科学的に分析するとはー 」

講師：武居　渡

司会：下谷　奈津子

○下谷　では、第一部の講演に入りたいと思います。お一人目は、武居渡先生です。

簡単にですが、武居先生のプロフィールをご紹介させていただきます。

武居先生は、金沢大学教育学系教授で、ろう児の手話言語の獲得過程に関する研究や、未就学のろう者のホームサインについての研究など、非常に多岐にわたる研究をこれまで行っておられます。

本日お話しいただくテーマは「手話獲得研究の方法論－ビデオデータを科学的に分析するとはー」です。武居先生どうぞよろしくお願いいたします。

○武居　ご紹介いただきました、金沢大学の武居です。本日はよろしくお願いいたします。

手話というのは、動画というか動きがあるものですので、それをビデオにとるだけでは実は分析ができないのですね。それを、どういうふうに科学的に分析するのかということを、手話獲得というよりは身振りの研究、ホームサインの研究になりますが、それを少し例に出しながら、どういうふうに手話獲得をするかという研究を進めていくかという方法論のお話になります。

＊講演映像＊

○武居　それでは「手話獲得研究の方法論ビデオデータを科学的に分析するとは」ということでお話をさせていただきます。

ここでは手話獲得の研究そのものではなくて手話を、あるいは手話の獲得を研究する上でどんな方法で研究をしたらいいのか、ということを中心にお話しして後のディスカッションに繋げたいと思います。よろしくお願いします。

手話の獲得を研究する上で、やはり心理学的な手法が重要になってくると思います。

心理学というのは、客観性それから妥当性、再現性を追求する科学の枠組みの中で、この３つを追求する、そういう学問領域になります。ですので、主観をできるだけ排除する。つまり研究者がこう思うからこうなのだということではなくて、その証拠としてこういう数字が上がっているから、あるいは統計的にこういうような有意差が出ている

から、あるいはこういうような使い方が出ているから、今言っていることは間違いではないんだ、客観性があるんだ、というふうに証明していくやり方をとっています。

心理学には色々な手法がありますが、主に手話獲得に関する研究の方法としては実験法と観察法になります。実験法は手話そのものの認知科学で使用される方法で子どもに対しては、どうしても設定された環境の中で実験的な枠組みを作っていくので、子どもには難しいところがありますので、手話の獲得、特に子どもの手話の獲得を見ていくにはやはり観察法という手法が、最も適しているというふうに考えられます。

観察法というのは、子どもの自然場面をビデオに撮りながら観察をしてその行動の特徴を明らかにするという手法です。つまり観察法というのは、手話の会話などをビデオに撮って、そのビデオを細かく後で見ながら分析をすることで、何かの事実を明らかにしていこうという手法になります。長所としては、ビデオを撮るわけですから、日常的な親子の会話だったり、幼稚部、小学部での友達同士のやりとり、会話だったり、日常的な自然場面を対象にできる。特定の枠組みを使わなくても、日常的な場面を対象にできるという強みがあります。しかも、日常的なやりとりをビデオに撮るだけですので動物やあるいは乳児も対象にできる。手話の場合には２歳、３歳の子どもであっても、単にやりとりをビデオに撮るだけですから、乳児に何か特定のことをしてもらうということではないですので、小さな子どもも対象にできるというそういう強みがあります。

一方で短所としては、ビデオを回しているその時間に見たいものが出なければ、それは分析できないわけです。つまり、行動が生起するのを待たなければならない。

例えば、手話による喧嘩というのが、音声言語の喧嘩と同じなのか、違うのかということを分析する場合に、ビデオを回していても手話での喧嘩の場面が出なければ、その分析はできないわけです。

つまり、行動が生起するまで待たなければいけない、ということが短所といえば短所です。それから、観察の解釈が主観的になりやすい。単にビデオを見て、こういう現象が起きました、ということを記述するだけだと主観的になりやすい。そのために何か別の工夫が必要だということになります。それから、観察可能な行動の限界がある。それは、そうですよね。ビデオに撮れる範囲のものしか観察できない。そういうような短所はありますが、それにしても手話獲得の研究をする上では観察法というのは、とても有力な方法になります。

ビデオデータというのは、単に子ども同士あるいは、親子で手話をしている。それが

映っているだけなので、それだけだと実はデータにはなり得ないです。単に手話をしている子どもが映っているだけですので、これを研究データにしていくためには、様々な工夫をしていく必要があります。

例えば、先程言った喧嘩というものに焦点を当てるのだったら、喧嘩の場面だけを切り出していくという作業が必要になりますし、指さしを対象にするのだったら、ビデオデータの中から指さしを一つひとつ取り出していって、それを分析するということになってくるわけです。そのときになるべく数字で表す。そういうような努力をすると客観性が高くなります。

例えば、指さしというのが１時間あたりに何回出るのか、それを例えば６カ月、７カ月、８カ月、９カ月、10カ月、１歳、１歳半というふうに年齢を追って１時間あたりにどのくらい指さしを使うのかというのを数字で出していくことで、指さしの経年的な変化を追うことができるわけです。

また、見たい事象をカテゴリーに分類する。例えば、同じ指さしでも色々な使い方がありますので、カテゴリーをいくつか決めて、このカテゴリーに属する指さしは何回出た、このカテゴリーに属する指さしは何回出た、というふうにカテゴリーに分類することで、その指さしの傾向を見ることができたり、手話単語の傾向を見ることができたりするわけです。ですので、カテゴリーに分類するというのも、とても有益な方法になります。

観察法の中には、いくつか研究法として、よく使われる方法があります。いくつか簡単にご紹介します。

一つはイベントサンプリング法といわれる方法で、これは特定の行動、例えば、さっきも言ったように、喧嘩とか指さしとか手話単語とか二語文とかそういうふうな特定の行動に焦点を当ててそこだけを切り出していくわけです。それがどのように生起して、どんな経過をたどって、どんな結果をもたらすか、というのを観察していくというのがイベントサンプリング法です。だからずっとビデオに映っている中で、喧嘩の場面だけを切り出す、指さしのところだけを切り出す、というふうにして切り出していって、それを細かく分析していきます。

例えば、先程説明しましたが、指さしの生起頻度とその使われ方に興味がある場合には、指さしを切り出すことになりますし、例えば、子どもの場合、一つの発話の中で結構同じ単語が繰り返されることがあります。その繰り返しに興味がある場合には、１発

話を切り出していって、その発話の中に全部で何語文で、そのうち同じ単語が何回使われているかということを分析することで繰り返し性、あるいは冗長性を観察することができるわけです。

あるいは、数を数えられないものもあります。その場合には、タイムサンプリング法という方法を使うこともあります。例えば、視線です。話し手やお母さんの方をどのくらい見ているかというのは、これは１回、２回というよりも、何秒とか何分とかというふうな秒で表されるわけです。そうなるとビデオ分析をする中で、もちろんストップウォッチで測ってもいいのですがとてもやりにくい。なので、タイムサンプリング法という手法があって、これはどういう手法かというと、データを５秒ごととか３秒ごとに切っていって、例えば、１分から１分５秒の間に、子どもがお母さんの方に視線を向けたら○、向けなかったら×、１分５秒から１分10秒の間に視線を向けたら○、向けなかったら×というふうに、○×あるいは０、１と打ち込んでいくわけです。そうすると、全体のコマ数の中で、○がいくつあるか、６セルあるうちの４つに○がついていれば、お母さんに視線を向けていた割合というのが66％、四捨五入すると67％になるということが数字で表すことができるわけです。ですので、数で表せない場合には、こんなタイムサンプリング法という手法もあります。

それから、参与観察法。これは数字で表すわけではありません。親子の会話とか特に学校場面などでは、自分自身もその構成員の一人として、そこに入り込んでいって、その役割を演じながら、そこに生起する事象を長期間にわたって観察をする、こういう手法で、主に文化人類学の枠組みから出てきた手法になります。次の松﨑先生の分析などはおそらく参与観察になるのではないかなと思います。

さて、こういうような手法がある上で、少し事例として、子どもではないのですが大人の手話、特に身振りの分析を私が学生の頃にしましたので、それを題材にして、少し方法論についてご説明したいと思います。当時、私が学生の頃Groceという人が「みんなが手話で話した島」という本を出していたのです。

これは、アメリカのある島では、聞こえる人も、聞こえない人もみんな独自の手話を使って会話をする。しかも、その独自の手話というのはアメリカ手話ともイギリス手話とも違う。本当にその島の独自の手話が作られて使われるようになったという、そういうことをまとめた本なのですが、ここから、聴こえない人たちが集団をつくると、別にろう学校に行かなくても、あるいはアメリカ手話とか日本手話のような特定の体系化さ

れた手話に出会わなくても、誰から教えられるまでもなく独自の手話ができあがっていく。ということは、言い換えれば、これはゼロから言語が出来上がっていくということですから、人間には生まれながらにして言語を作り出す能力があるのではないか。こんなふうに非常に強く感銘を受けたわけです。

同じような現象がGoldin-Meadowという人の研究の中にもあって、これは手話環境にない、つまり口話教育を受けている子どもの身振りを分析したものですが、口話教育を受けて、手話に全く触れたことがない子どもたちであったとしても、その子たちが使う身振りは、周りの聞こえる大人が使う身振りよりも、はるかに高次の複雑な構造をしているのだということを明らかにしたわけです。これも手話環境がないにもかかわらず、手話に類似した複雑な構造を持つ身振りを、聴こえない子どもたちが使うということは、「人間は言語を作り出す力があるのではないか」ということを推測せざるを得ないわけです。

研究の目的ですけれども日本にも「みんなが手話で話す島」のようなものが、これだけ島があるのだからあるのではないか、そしてそういう島がもしあったとしたら、その人たちが使う身振りを分析することで言語を生み出す能力というものを、研究で明らかにすることができるのではないかというふうに考えました。

沖縄のある島に住んでいる、学校に行ったことのない、教育を受けたことがない、そういうろう者は身振りを使ってコミュニケーションをとっているのですが、その人たちの身振りというものを細かく分析をして、その構造というのが手話と似ているのか、似ていないのかというのを明らかにする。そういうような研究を大学のときに行いました。

延べ２カ月間に渡りその島に滞在をして、約10人の不就学のろう者のホームサインについてビデオ収録をしました。そのうちの２人はもう30本以上、ビデオを収録して何度も何度もその家に通いました。最初は何を言っているか全然わからなかったのですが、２カ月間一緒に滞在していましたので、最後の頃には何を言っているかだいぶわかるようになってきました。そして、だいぶわかるようになった後、そのビデオを見て、身振りを細かく分析をしました。

対象になるろう者というのは70歳と67歳のろうの姉妹です。非常に流暢な身振りで会話をします。一見すると手話のように見えます。ただし、日本手話がわかっても、この人たちの使う身振りは全然わかりません。日本手話とは全く異なる、この２人が独自に作った身振りで会話をしています。それを分析の対象としました。

まず、どこから私は手をつけたかというと、そのろう者の身振りというのを、まず動画でカメラに収まっていますので、それではどうにも分析ができないので、すべて日本語ラベルにしたトランスクリプション、つまり書き起こしをしたのです。どういう身振りが出たのかということを全部書いていきました。

実際に観察をしているときから気になっていたのですが、指さしが非常に多いなというのを直感的に思っていましたので、トランスクリプションを作ったあとで、非常に数が多い指さしと、それからそれ以外の身振り、ここでは「特徴模写的身振り」と言っていますが、この２つに分けてそれぞれ分析をしました。指さしについては、まず何を指しているのかというのを分析しました。

つまり、指さしの延長線上にあるものを表している場合には①、その場にないものを表している場合には②、しかも指さしが語彙になってしまったものが③、そして語ではなくて、文法マーカーとして機能している場合は④、下に行けば行くほど高次の指さしの使い方と言えるのですが、そういうような指さしが何を表しているかということを分析しました。

また、指さし以外のいわゆる手話、身振りについては、まず両手手話と片手手話で分けて手の形をすべて記述しました。右手がどういう手の形、左手がどういう手の形、その上で右や左の手の形が何を表しているのか、人間が物を扱っている手の形を表しているのか、それとも、物そのものを表しているのか、それ以外なのかということを分析しました。

指さしについてまず少し説明をしたいと思います。

まず、トランスクリプションを作りました。活字の部分がトランスクリプションです。そして、「PT」という表記が指さしになるわけです。このPTの上に「H」とか「A」とかマークがついていますが、これが何を表しているかを表したものです。今だったらExcelでもっとエレガントにできると思うのですが、当時はまだExcelがなかったので、こうやって一つひとつ手で書き込んでいます。

「H」というのは具体物を表します。今ここにあるものを表しているもの、真ん中あたりに「Lex」とありますが、これは語彙化した指さし、そういうようなことを表しています。Hがいくつ出て、語彙化した指さしがいくつ出てというのは、あとで数えて全体の中の割合を算出しています。

それから、指さし以外の身振りについては手の形をすべて記述しました。そして、そ

れぞれが何を表しているかというのを書いていきました。例えば、121番目に出た語について、「R」というのは、右手だけで表出されて、右手の手の形はB手型、これ手を開いた指文字の手の形です。何を表しているかというと「O」、つまり物体を表しており、具体物は何を表しているかというと、洗濯物や水を表していて、これは洗濯機という意味なのですが、そういうように、何を表しているのかというのを全部書き込んでいき、この「O」と「H」と「S」がどのくらいの割合で出ているかというのを算出したわけです。

こういうふうに数字で表すと、例えば、全部で1039語あるうちの３割が指さし、確かに指さしが、このおばあちゃんたちが使う身振りに多いなということが数で表すことができるわけです。そして、その指さしの中でも具体物がもちろん一番多いのですが、その場にないものとか、語彙化した指さしも一定数あるということが、ここからわかるわけです。

ここでの結論ですが、指さしが様々な機能を果たしているということです。単に具体物だけではなく、その場にないものや語彙化した指さしまでも表している。しかも、文法マーカーとしても使われている。これは、このおばあちゃんたちは日本手話を見たことがないにもかかわらず、日本手話と非常に類似した指さしの使い方をしているということが明らかになったわけです。それから、手型の使い方についても詳しくはお話ししませんが、日本手話のCLに極めて類似した構造を持っているということがわかり、手話経験がないにもかかわらず、手話と極めて類似した特徴を持っているということが明らかになりました。

ここまで私が卒論で書いた、沖縄のおばあちゃんたちの身振りについての分析のお話をさせていただきました。漠然としたおばあちゃんの身振りというのを、指さしとそれ以外で切り出していったり、指さしが何を表しているかを書き出していって、それぞれが何を表しているかの割合を算出することで、数字で表すことができたりとか、あるいは、指さし以外の身振りでも、手の形がどんなふうに使われているかということを記述していくことで、数字で表すことができるようになり、そこから何が言えるのかということを考察するということが可能になるわけです。

こんなふうに、漠然とした動画をある視点をもって分析していくことで、客観性の高いデータに変えていくことができるわけです。なので、この後のワークショップでは、今の方法論に関する私のお話とか、プレゼンテーションについての質問を、まずお受けすることから始めたいと思います。その上で時間があるようでしたら実際に聞こえない

子どもたちの手話獲得を分析するためには、どんなデータをどんなふうに分析したらいいか、ということを少し皆様なりに考えて報告をしてもらおうかなというふうに思います。

自分だったらどんなデータを集めてどんな分析をしたいと思うのか。例えば、初語の分析をしたい、二語文の分析をしたい、文法の獲得の分析をしたい、そう思ったときにどんな場面をビデオ収録し、どんなふうに分析したらそれが明らかになるのか、そういうことを、少し意見交換をして研究手法について学んでいきたいと思います。

私のプレゼンは以上ですけれども、もし質問等があればお寄せいただければと思います。

○下谷　武居先生、ご講演ありがとうございました。

研究方法について具体的にお話を伺いました。観察法など色々な方法があるということで、大変感銘を受けました。また、そのビデオデータを単に収録するだけではなく、データを加工して分析していくことが必要だ、ということも学び、非常に興味深いお話を聞くことができました。武居先生、改めてありがとうございました。では、今から質疑応答の時間を設けたいと思います。

＊質疑応答＊

①手話での質問

○質問者　ご講演いただきありがとうございました。

ビデオデータの撮り方について、例えば、固定をして撮っているのか、はっきり手話のデータを撮るためにどのような工夫をされているのか教えていただきたいです。子どもの場合ですと動きますので、データを撮るのが難しいと思います。また、後ろから撮った場合、なかなか手の形が見えないということもあると思います。今回、研究でどういった撮り方をしていたかについて教えてください。

○武居　ご質問いただき、ありがとうございました。

私が以前していた研究のときは、三脚を使って撮りました。大人の場合、動き回ることがありませんので、固定をした状態で撮りました。子どもの場合、母親と子どもの会話というのを、三脚を使って撮ったことがあるのですが、子どもが動く場合、その三脚ごと私も移動をしてデータを収集しました。更に、子どもの場合、カメラに向かって歩いてきたり、カメラを触ることがありますので、入れない、触れないような形でカメラを固定して撮影をしました。そういった、色々大変だった事例もありました。

②文章での質問

○武居　ご質問は５ついただきました。

全てにはお答えできないですが、非常に核心に迫る質問や、実際的なご質問もいただいたので、お答えしたいと思います。

まず１つ目ですけれども、「時間データをどういうふうに組み込むのか」というご質問です。多分実際にこういうデータを撮らないとこういう質問できないと思うので、質問者も非常に苦労をしたと思いますが、私も非常に苦労しました。当時はS-VHSという、今はないのですが、そういうテープを使っていて、それは時間データが入らないものでした。ですので、大学に１台だけカウンターを入れる機器があったので、撮ったデータを持っていって、またカウンターの入った別のテープをつくってそれを分析しました。なので、非常に苦労しました。デジタルになってからはそれぞれの場面に時間のコマがふられますので、今はそんなに苦労しなくてもできるのではないかなと思います。

それから、もう一つ、同じ方からご質問をいただきました。「今回非常に古いホームサインのデータを出したのはなぜですか」。

手話獲得のお話をしてもよかったのですが、それを可能であれば、この次の第二部に扱おうかと当時は思っていたので、卒論の古いデータを出しました。

ただ、こういうビデオ分析は膨大な時間がかかります。たかだか、沖縄のろう者との30分のビデオを分析するにも、トランスクリプションをつくるだけでも10時間かかりましたので、そういう意味ではかなり時間がないと研究できないということが観察法の難しさではないかなと思います。

それから、これも非常に核心に迫るご質問です。「日本手話を第一言語としているろう者の発話との比較はしていますか」ということなのですが、残念ながらしていません。

ただ、この後、私は、両親がろう者で子どももろうという、両親ろうの聞こえない子どもたちの指さしの研究もしているのですけれども、その指さしの特徴と、沖縄のホームサインの指さしの使い方は極めて類似しているのです。一方で聞こえる子どもたちの指さしのデータも取ってみたのですが、それはまた全然違うのです。なので、そういう意味では大人の分析はしていないけれども、手話環境にある子どもの指さしの研究というのは、極めて沖縄のろう者と類似しているというのがありました。

続いて、「何かこういう手話を記述するときの書籍があればご紹介ください」ということですが、実はないのです。書き起こすだけならそのまま文字で書き起こせばいいのですが、ここでポイントになるのは、書く側が視点を持っていないと、実は、トランスクリプションは役に立たないのですね。

いわゆる、手の形とか動きとか興味があるなら、細かく書く必要があるし、どっちかというと、どんなふうに使うのかという語用論的なものに関心があるならそんなに細かく書く必要はないわけです。なので、単に書いてから何を分析するかを決めるのではなく、どんな分析をするかを決めてから、トランスクリプションをつくるということをおすすめしたいと思います。

○下谷　武居先生、ありがとうございました。たくさん質問をいただいていたのですが、時間の都合もありますので、ここで終了させていただきます。ありがとうございました。

【第一部】講演２

「ろう重複障害の子どもたちの手話をどう捉えるか

－ろう学校でのフィールドワーク－ 」

講師：松﨑　丈

司会：下谷　奈津子

○下谷　続きまして、松﨑丈先生の講演に入りたいと思います。

まず簡単に松﨑先生のプロフィールをご紹介させていただきます。現在、宮城教育大学の准教授をされております。松﨑先生も武居先生同様に、非常にこれまで多岐にわたる研究を進めておられました。特に手話のことについて、また、ろうの重複障害の子どもたちの手話表現について、発達についてなど非常に深く研究を進めておられます。

本日講演いただくテーマは「ろう重複障害の子どもたちの手話をどう捉えるかーろう学校でのフィールドワークー」です。では、松﨑先生よろしくお願いいたします。

○松﨑　ご紹介にあずかりました宮城教育大学の松﨑と申します。よろしくお願いいたします。

私は、大学院まではろうの子どもの手話の発達について研究を進めてまいりました。

現在、ろう学校では、ろうの子どもだけではなく、ろう重複の子どもたちが大変増えております。そこで、ろう学校の先生を支援する仕事も行なっております。ろう重複の子どもと手話の関係について、まだまだ先生たちは専門性を有しておられるというわけではございませんので、その辺をろう学校へフィールドワークに行って、どのようにろう重複の子どもたちを見ていったらいいのか観察を進めてまいりました。その結果、わかったことが幾つかありますので、講演をさせていただきたいと思います。

その後、ワークショップでも、是非、忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

よろしくお願いします。

＊講演映像＊

○松﨑　本日は「ろう重複障害の子どもたちの手話をどう捉えるかーろう学校でのフィールドワークー」というテーマでお話させていただきます。では早速ですが、皆様の中には、ろう重複の子どもと関わったことがある方おられるかもしれません。本講演では時

間の関係もございますので一つだけ事例をご紹介させていただきたいと思います。

対象の子はＡさんで、彼女が５歳３カ月の時に研究を行いました。公立のろう学校幼稚部の年中児クラスに在籍しておりまして、聴覚障害と発達障害の重複があります。聴者の両親と、手話を用いるろうの祖父母と同居されています。放課後はいつも、祖父母と手話でコミュニケーションをとっておられます。また、乳幼児期の手話導入を、全国で先駆けて行なっている公立の学校に通っております。

ということで、彼女は、生まれた時から周りに手話があるという環境で育ってきたということです。

ただ、彼女の手話は少し曖昧でして、ろうの祖父母が見ても何を言っているのかよくわからないということがございました。また、学校でも、教員が子どもたちに何か話しているのにもかかわらず、Ａさんは自分の世界に入ったかのように独り言を言ったり、手を動かしたりしているということがあります。今からご覧いただくＡさんの映像は、過去に自分が経験したことをみんなの前で発表する、という内容です。どういう雰囲気の子なのか、この映像を一度ご覧いただきたいと思います。

（映像）

このような手話を表現するＡさんです。詳しくはまた後ほどご説明させていただきたいと思います。

まずは、ろう重複障害教育における現状と課題についてお話させていただきます。

ろう学校における重複障害の子どもの数は年々増加しております。しかしながら、ろう教育の現場で重複について専門的に学ばれた先生というのはほとんどおられませんし、また、子どもたちに対する支援の方法についても非常に困惑されているという現状があります。

また、重複の子どもたちに対する手話の分析が過去にありまして、例えばASD、自閉症の子どもたちの手話の表現というのは、手のひらの方向や向きに誤りが多かったりして、手型が非常に曖昧だというような報告がございます。

しかし、手のひらの向きに誤りが多いとか、手型が曖昧というだけで子どもたちに対する支援をより確実に行うための十分な参考になっているのか、というと疑問が残るところです。実情としましては、ろうの子どもたち、重複の障害の子どもたちというのは

個々によって様々で、障害名や診断名だけで判断できるもの、ひとくくりにできるものではございませんし、また、個々の多様な実態を理解しながらコミュニケーションの成立をしていく。そのような糸口を見いだせるような研究が必要なのですが、過去の先行研究ではそれが見当たりません。

そこで今回、私は、盲ろう教育の過去の研究の中から、参考になるものがあり、そこに書かれていることは、様々な学問分野から人間の発達とコミュニケーションに関わる研究の知見を収集、整理して、盲ろう者の子どもたちの条件に合わせて理論化する。そして、実際に盲ろうの子どもたちにそれが合うのかどうか実践してみるというようなことでした。これを同じようにろう重複の子どもにも援用できるのではないかと私は考えました。

Ａさんに関して言いますと、まず３つの学問分野領域が参考になりました。

まず１つ目が手話言語学。その中の音韻論です。音韻論といいますのは手の形、動き、位置です。ただ、これはろうの子どもに対してだけの研究ですので、重複の子どもたちに置き換えて考えると、より丁寧に見ていく必要があります。次に２つ目が発達心理学のコミュニケーション、３つ目が教育心理学の重複障害教育です。これらの情報を収集しまして今回研究を進めてまいりました。

重複障害教育に関しましては、日本で盲ろう教育を50年にわたり実践教育、実践研究されてきました梅津八三先生という東京大学の先生がおられるのですが、その先生の考え方も援用できるのではないかと思い、今回研究を進めました。梅津先生の研究の中に、行動体制というものがございます。

例えば、歩道を歩いていて赤信号を見ると止まりますよね。梅津先生は、その行動をより丁寧に分析して研究をされました。

まずは、信号源というものがあります。この場合は赤信号です。人はそれを見て色々な情報を分析しているわけですね。例えば、その信号が、明るいのか、暗いのか、色が赤なのか、青なのか、形が丸なのか、四角なのか、その物自体が大きいのか、小さいのか、物の位置が上にあるのか、下にあるのか、など様々な情報が含まれています。これらを概括し、「止まる」という行動を実行するわけです。

必要な情報だけを抽出してその信号となるわけですね。明るくて、赤で四角。その情報により初めて「止まる」という行動に移すわけです。人間は外界の情報を細かく分析して処理していく、そして行動する、そういった調整をしているのではないかというよ

うなことが梅津先生の研究内容にあります。

そこで、Ａさんの手話の表現を見たときに、彼女にとっては別の世界である周囲を見てどのように手話の情報を処理しているのか、梅津先生の考えが援用できるのではないかと考えました。例えば、先程見ていただきました映像の中で、彼女は「野菜を入れた」と言いたかったわけですね。

その映像をもう一度ご覧ください。

（映像）

おわかりいただけましたでしょうか。他にも、Ａさんの色々な手話表現のデータを収集し整理しました。その結果わかったことがございます。

まず、Ａさんが周囲の手話を見た時に、位置、運動方向、そして、速度、手型、運動軌跡、この５つを信号素材として処理をするわけですが、表出したものを見ると、彼女にとって必要な情報というのは、どうも位置、運動方向と速度の３つのようなのです。

先程の例を見てもわかるのですが、彼女が手話表現している位置には特に誤りありません。また、運動の方向についても誤りはございません。ただ、運動の軌跡については脱落しているのです。

例えば、山本さんという人がいるとします。その山本さんの名前を表現する際に、この /山/という表現は、方向は向かって左から右で、山なりに運動軌跡があるわけです。しかし、Ａさんの場合は、運動の軌跡が脱落しているわけですね。

Ａさんは、運動の軌跡が特に大事だという認識をしていない、認識していないということです。また、手型についてもそうです。/入れる/という手話の手型も異なったものでした。このように手型についても彼女は特に必要性をまだ十分に認識していないのではないかと思われます。

Ａさんが周りの手話を見たときに、運動軌跡と手型の認識が欠落し、位置、運動方向、速度のみ認識され、それが実際の手話表現となるのでは、と思いました。そこで、学校の先生に彼女を支援する際、手型と運動軌跡の必要性を十分に彼女に気づかせるため、強調して表現した方がいいのではないかと提案しました。

例えば、/山本/という手話を表現する際に、まず手の形と軌跡があるということを十分に気づかせるようはっきりと表現する。それを頭に入れて彼女と手話でコミュニケー

ションをとってみてくださいと先生に提案をしました。

そして３カ月後、再びろう学校に行き、久し振りに彼女の手話を見ると明確に変わっておりました。手型と運動軌跡をはっきりと以前よりも明確に表現するようになっていました。現場の先生や他の子どもたちも、以前よりもコミュニケーションがとりやすくなったようでした。また、今でも自分の世界に入って、独り言のような手話をしていることがあるのですが、その独り言のような手話の中にも、以前よりも明確な表現が見えるようになりました。

例えば、独り言で/家/という表現をしていて、「家がどうしたの？」というところから会話が始まり、コミュニケーションがとりやすくなった様子が見られました。相互のコミュニケーションが円滑になったようでした。

今回の研究から見えてきたことは、ろう重複の子どもの行動や手話が、一見、曖昧で未熟に見えたとしても、信号源がある外界の相互作用をより丁寧に、かつ、的確に観察分析すれば、その人の行動や思考がより理解できるようになってくるのではないかと。それに合わせて、私たち教育者もどのような支援をしたらいいか糸口を見出すことができるのではないかということです。また今回の研究は、他の事例でも援用できるのではないかと思いました。

例えば、言語獲得をする前の難聴・ろうの乳幼児、また、知的障害や発達障害、運動障害なども併せ持つろう児。そして、発達障害と知的障害のみの子どもたちに対しても援用できるのではないかということがわかってまいりました。また、学校現場で開かれる教員同士の研究会や研修会などで、研究結果を共有し、子どもたちとの関わり方を提案したりし、普段の教育現場を収録し、それを先生方と一緒に分析するというような形でも支援をしています。そして、先生方からは子どもたちの行動について、以前よりも理解しやすくなった、必要な支援についてより深く考えられるようになったというような報告もいただきました。

先程挙げましたＡさんの事例についてより深く知りたい方は、今、Ａさんも含めた様々な研究をまとめた論文をネット上で掲載しております。無料で閲覧可能ですので、もしよろしければご覧ください。

結びにあたりまして、今後の課題についてですが、ろう重複障害教育というのは、単にろう者の手話を導入するだけでは十分とは言えません。まずは、コミュニケーションをどう成立させるか、というところから考えていかなければなりません。また、教育現

場で明確な指針を示す、よりダイレクトに関わるローカルな理論をつくる研究が求められます。そのためには手話言語学だけでなく、発達心理学や教育心理学など多様な知識体系を収集、整理し理論化して実践への適用を重ねていく必要があるのではないかと思います。

そのように進めていく中で、ろう重複障害教育の専門性がより確立していくのではないかと思っております。

今後も研究を進めてまいりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

＜補足資料＞

Note 記事「ろう重複障害」における教育実践の探求

https://note.com/matsuzakijo/n/n2f103cbf611c

○下谷　松﨑先生、ご講演ありがとうございました。

ろう重複障害といっても、非常に多様性があり、その手話表現を表面的に見るだけではなく、どのような背景があって、それがどのような表現に繋がっていくのかということが非常に勉強になりました。ありがとうございました。

＊質疑応答＊

○下谷　では、ただ今から質疑の時間に入りたいと思います。文章での質問がいくつか来ておりますので、松﨑先生、幾つかピックアップしてご回答お願いできますでしょうか。

文章での質問

○松﨑　ご質問ありがとうございます。３つ質問をいただいております。

まず、１つ目の質問です。「観察に行った公立のろう学校が用いているのは、日本手話なのか対応手話なのか」というご質問です。

どちらかというと対応手話なのですが、私がフィールドとしていた公立ろう学校幼稚部には日本手話話者のろうの先生も配置されていますし、聞こえる先生の間でも日本手話を使える方が広まってきているということです。その後、ろうの先生が何人か配置されるようになってきまして、Ａさんの幼稚部でも、日本手話を見られる環境にいるということです。

２つ目の質問です。「自閉症のろう重複の子どもの手型が曖昧ということについて。これは一般のろう児でもそういうことがあるのではないか。また、手話学習者でも共通点としてあるのではないか」ということですね。

私はこの辺りの比較はしておりませんが、個人的には、ろう重複といっても本当に様々ですし、例えば、１つ例を挙げますと、手の形ではなくて運動の軌跡に関わる例で、他に見たろう重複の子どもで /名前/という手話をするときに、表す位置が異なっていたりし、/靴/という手話を表現するのも、非利き手（左手）を使わずに利き手（右手）だけで表現している。左手が不自由というわけではないですが、このように表現する子どもがいます。

また、/家/という手話も利き手だけで表現する子がいたり、両手を使わずに、あえて利き手しか使わない子がいたり、ろう重複の子どもでも「曖昧」ではなくどのようなパターンとして表れているのかが多様であるといったほうが適切でしょう。ですので、重複ではないろうの子どもたちと比較したときに、パターン化できるのかわかりませんが、もう少しデータを集めて、そういうようなパターンがあると言えるかどうかを、今後引き続き研究を進めていきたいと思っております。

次の質問です。

続いては、「Ａさんの祖母は日本手話話者ですが、その祖父母でも、Ａさんが何を言っているのか理解できないのに、なぜ私（松﨑）が理解できているのか」という質問です。

私はその祖父母の方とお会いしていないので、具体的な話を聞いていないのですね。そのろう学校にはろうの先生がいますが、そのろうの先生も、彼女が今どのようなことをしゃべっているのかよく理解できないと言っております。

祖父母の方も、学校のろうの先生も、手話言語の表面的なものだけにこだわって見てしまっているのではないかなと思いました。ということで、私はもっと彼女の手話表現の背景について、どういうことが関係して、そういう表現になっているかを見ていこうと思いまして、今回の研究に至ったわけです。

ろう学校に足を運んで、午前中、ろう重複の子どもに会って、手話を見て、データを集めて、お昼に分析をして、午後にその結果を発表する。その日のうちに、先生に何か提案をしないといけないのです。そういうこともあって、非常に観察力が求められる仕事です。大学院のときは、ろうの子どもたちのナラティブを研究していく中で、非常に繊細な見方というのを私は習得しているのではないかと自分で思っております。

ですので、その観察するスキルというのは、繰り返し繰り返しフィールドワークを積み重ねていきましたので、自分自身できているのではないかと思っております。

次にいただいている質問が、「枠組みをどういうふうに持つことが大切ですか」ですが、私は学生のときから手話言語学を勉強してまいりました。ろう重複の子どもを支援する際に、手話言語学だけでは十分ではないのではないかと思いまして、色々な学問領域を参考にして、支援や研究を進めていくのが必要ではないかと思いまして、フィールドワークに出るときにどのような理論を自分の中で持っておくかというのが非常に大切だと思っています。

また、他に質問いただいている部分は、第二部のワークショップで、是非、回答させていただきますので、よろしくお願いいたします。

○下谷　皆様、どうでしたか？

フィールドワークというもの、少しイメージが持てましたでしょうか。

第一部はこれで終了とさせていただきます。

【第二部】ワークショップ

講師：武居　渡

松﨑　丈

司会：下谷　奈津子

＊ワークショップ（グループに分かれてのディスカッション）＊

○下谷　ディスカッションのほうはいかがでしたでしょうか。

おそらく時間が足りなかったのではないでしょうか。

研究に関心を持って、これから研究を、是非やってみようと、非常に熱心になられた方もいらっしゃると思います。

これからろうグループと聴グループ、それぞれディスカッションをした内容について、報告をしていただきたいと思います。

まず、ろうグループのほうです。代表の方、報告のほうをお願いいたします。

○報告者　まず、松﨑先生を交えたディスカッションの内容です。

ろう重複の児童のデータを収集して研究をされている方は、日本の中では松﨑先生お一人で、松﨑先生が一生懸命データを集めていらっしゃいますが、数が限られてしまうということで、今後もっとデータのサンプルを増やしていきたいというお話がありました。

ろう学校の先生方が、教育現場で生徒とのコミュニケーションに行き詰まっているとき、松﨑先生のビデオデータを見せながら説明をし、先生方の見る力を養うという取組みが参考になったという意見がありました。

武居先生を交えたディスカッションの場合、20年前の沖縄での調査研究に関する質問が多かったです。対象者のお婆さん２人の場合、２人暮らしで周りからの言語影響がないということでしたが、地域の人たちもその２人の身振りが少しわかるということでした。武居先生が実際にデータを収集される中で、コミュニケーションをとるために色々表現を学ばれたということも話としてありました。その姉妹の身振りの特徴として、同じ単語を繰り返すということがありました。例えば、「今日は暑い」と言う時に、「暑い」という表現と、汗をかく表現が繰り返されて、一文を構成しているというような表現があったということでした。他のろう者からは、単語が繰り返し表現されているので、認

知症じゃないかということを言われたそうなのですが、実際は、彼女たち自身の特徴的な表現だということがわかりました。もし、聞こえる人も声や音がない環境であれば、身振りのようなものを使って言語を作り出していくのではないだろうか、という話をしました。改めて、手話などの言語の起源に対する興味なども話し合えました。ありがとうございました。

○下谷　短い時間でしたが、非常にいいディスカッションができたようですね。

ありがとうございました。

では、次、聴グループ代表の方お願いします。

○報告者　武居先生のお話については６つ質問がありました。

１つ目は、手話のトランスクリプションの記述法について。例えば、海外の研究ではストーキー法などの記述法などがありますけれども、そういうものは使わないのですか、という質問でした。これは、武居先生の講演の中でもあったように、何を分析するかによって使える表記方法が変わってくるということのお返事がありました。

例えば、音韻を重視するのであればハムノーシスなどがありますが、音韻を重視しないのであればこれだと細かすぎるというような紹介がありました。

２つ目は、保育士さんをされている方から、高度難聴の２歳の子どもの指さしが出始めているけれども、その子どもと、ろうの子ども、聞こえる子どもの指さしの違いというのは、どういうことなのかという質問がありました。

それに対しては、手話を話す子どもであれば、指さしの機能がどんどん増えてくるという話がありました。

あと、聞こえる人が分析をするときに、手話の表現の分析の妥当性をどう担保するかについては、大人の表現であればろうの人と検討するといいけれども、子どもは、子どもの話している文脈とかがわかるものじゃないといけないので、ろうの大人が入ったからよいというわけではないという話がありました。

松﨑先生のお話についてですが、３つ質問がありました。

ろう重複の子どもで、知的障害とか自閉症があった場合に、就学先はろう学校がいいのか、知的障害の学校がいいのかということについて、松﨑先生のお考えがどうかという質問があり、手話の表出ができるかどうかなどが問題になると思うけれども、その子どもによってニーズが大分違ってきますよというお話がありました。

○下谷　ご報告ありがとうございました。

本当に短い時間で、色々とディスカッションができてよかったと思います。

皆様、ご協力いただきありがとうございました。先生方も、ご協力いただきましてありがとうございました。

閉会の辞

森本　郁代

○森本　手話言語研究センターの副長をしています、森本と申します。

本日はお忙しい中、関西学院大学手話言語研究センターの手話学コロキアムにご参加いただき、ありがとうございました。

第一部では、武居先生、松﨑先生にそれぞれのご研究について、貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。

先生方のご研究は、フィールドでの自然な手話の使用を丁寧に記述することによって、新たな知見を見いだしておられるものだと思います。私自身も、日常生活の様々な場面におけるコミュニケーションを会話分析という方法を用いて研究していますが、フィールドに赴いて観察することの重要性を改めて認識するとともに、先生方の大変挑戦的なご研究内容に感銘を受けました。ありがとうございました。

第二部のワークショップでは、参加者の皆様とともに、手話の研究の可能性についてディスカッションする機会を設けさせていただきました。初めてのオンラインでの開催ということで、ディスカッションがやりにくいということがないかと心配しておりましたが、どちらのグループも活発な意見交換がなされており、皆様のこのテーマに関する関心の高さを改めて知ることができました。

時間が短くなってしまったのが本当に残念です。私は、見学者という立場で参加していたのですが、私も、皆様と一緒に色々お話ししたいなと思い、最初から参加者として入っていればよかったなと少し後悔しました。

今回のコロキアムが手話学の研究の新しい種をまくきっかけになればと思います。

私たちは、これからも手話学研究に対する関心の種をまき、それを育てていくための機会を積極的に作っていきたいと思いますので、そうした機会に、是非また、皆様とお会いできれば大変うれしく思います。

本日はどうもありがとうございました。

登壇者紹介

武居　渡（たけい　わたる）　（金沢大学人間社会研究域学校教育系教授）

松﨑　丈（まつざき　じょう）　（宮城教育大学 特別支援教育講座　聴覚・言語障害教育コース准教授）

松岡　克尚（まつおか　かつひさ）　（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター長）

森本　郁代（もりもと　いくよ）　（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）

下谷　奈津子（しもたに　なつこ）　（関西学院大学手話言語研究センター研究特別任期制助教）

（所属、職名は開催当時のものである）

文化イベント

開催日時：2020 年 11 月 7 日（土）オンライン開催
受付開始：13:00
開　　会：13:30
閉　　会：15:30
参 加 者：68 名

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

感じよう！
ろう芸術の
チカラ

ZOOMウエビナー de デフアート

～表象されるろう者～

デフアートとは…ろう者の文化や手話をモチーフにしたアート作品です

2020年 11・7 SAT

申込〆切：10・30(Fri)

PM 1:30～

1:30～　開会（1:00入室可）
講演
乗富秀人氏　「デフアートとは」
門 秀彦 氏　「デフアートの社会への効果」
田中久美子氏「絵画における表象」
2:35～　座談会
モデレーター：塚田幸光氏
3:20～　閉会

手話通訳
要約筆記 が付きます

参加費無料

通信機器、インターネット環境があれば
どなたでも参加できます。
参加者のお顔は映りません。

【定員】先着 80 名

お申込み方法

下記QRコードまたはURLよりお申込みください。
https://bit.ly/2DKryY6

【主催・お問い合わせ】
関西学院大学
手話言語研究センター

FAX　：0798-54-7014　TEL：0798-54-7013
E-mail：slrcenter@kwansei.ac.jp
URL　：https//:www.kwanseiac.jp/c_shuwa/

ろう画家
乗富秀人氏（ろう者）

デフアート
絵本
『手話で生きたい』
著者。日本における
デフアートの
先駆者！

イラストレーター
門 秀彦氏（聴者）

手話の
スターバックス
国立Nonowa店内
アートでおなじみ、
手話をモチーフにした
「HAND TALK」
が人気！

文星芸術大学教授
田中久美子氏（聴者）

『名画で学ぶ
主婦業』監修。
Twitterでバズ
ったあのハッシュ
タグ！

モデレーター
関西学院大学法学部教授
塚田幸光氏（聴者）

開会の辞

松岡　克尚

○松岡　皆様、こんにちは。

関西学院大学手話言語センターの松岡と申します。主催者を代表して、ご挨拶申し上げます。

手話言語研究センターは、その名前のとおり、手話言語を取り上げて言語学的な研究を中心に活動をしていくことを目的に2015年に設立されました。それ以来、手話の言語学研究のみならず、大学で手話言語学の授業を開講し、社会に対しても手話言語に関する最新の研究情報やトピックスを配信してまいりました。

このように、私どものセンターは、手話言語学の研究、教育、あるいはその啓発というところを軸において、これまでの歩みを進めてまいりました。そして、この軸を大事にしながらも、言語学にとどまらず、もう少し広く手話を取り巻く様々なテーマについても研究、啓発を行ってきました。その取組みの一つが、本日の文化イベントになります。

文化イベントとは、手話が織りなす世界、あるいはろう者の世界やその文化を知っていただくことを目的としたもので、これまで、デフカルチャー一般のみならず、ろう者の映画、手話落語などを取り上げながら、この文化イベントを毎年開催してきました。

今年度の文化イベントは、デフアート「表象されるろう者」をテーマに、デフアートを取り上げています。

デフアートとは、ご存じの方も多いかもしれませんが、ろう者の生活背景、それから手話、ろう文化などをモチーフにした一連の芸術作品を意味します。

本日の私どものこのイベントのために、素晴らしい講師の方をお招きすることができました。

まず、ろう者の画家であり、日本の「デフアート」の先駆者である乗富秀人先生。そして、コーダでいらっしゃり、手話をモチーフにした作品を数多く手がけてこられているイラストレーターの門秀彦先生です。このお二人からは、まさしくデフアートの表現者というお立場でデフアートの魅力を語っていただけるのではないかと思っています。更に、ハッシュタグで大人気になった「名画で学ぶ主婦業」の田中久美子先生もお迎えしております。

文星芸術大学の教員でいらっしゃる田中先生からは、デフアートの外側からになりますが、アート鑑賞の楽しみ、聴者の立場から見たデフアートをお話しいただけるのではないかと考えています。

そして最後に、講演いただいた３人の講師の方に加えて、本学法学部教員の塚田幸光先生にも、モデレーターとして加わっていただいての座談会を予定しております。

塚田先生は、映画学、表象文化論を専門にご活躍をされています。アメリカ映画を分析され、そこに見いだせるジェンダーや政治を浮き彫りにされています。

本日は、以上の盛りだくさんのメニューですが、皆様と一緒にデフアートや絵画における表象、ろう者の文化について考える時間になればと願っております。

本日は、Zoomのウェビナー方式での開催となり、対面でのイベントとは雰囲気が違いますが、オンラインのライブだからこそ得られるものもあるかもしれません。

どうか、最後までお楽しみいただければ幸いです。

以上、簡単ですが主催者挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【講演１】

「デフアートとは」

講師：乗富　秀人

司会：前川　和美

○乗富　乗富と申します。よろしくお願いします。

本日は、「デフアートとは」というテーマで動画を準備しておりますので、どうぞご覧ください。

＊講演映像＊

○乗富　こんにちは。「デフアートとは」というテーマでお話しします。

「デフアート」という言葉は、「デフ」と「アート」、つまり、「ろう」と「芸術」という２つの言葉からできていますが、この言葉に関しては誤解も多いようです。ろう者（デフ）が作った作品をデフアートなのだろうと思っている人が多いようですがそうではありません。手話言語や、ろう者の歴史、ろう文化、これらをモチーフにした作品であれば、作者がろう者であれ、聴者であれデフアートと言います。

デフアートについてお話しする前に、私の歩みについてお話をします。

私は、生まれは東京です。先天性のろう者です。ろう学校で幼稚部から専攻科までを過ごしました。幼稚部では、聴覚口話法で教育を受けました。聞こえの状態にかかわらず、耳を使って聞く、音声で話をするという指導でした。また、親からは音声で話しかけられてもわからず、授業も音声で進められたので理解できず、わかったふりをすることが多かったです。中学部までそんなことを続けていました。授業の内容が理解できないため、学力は３年から５年ぐらい遅れていました。

マナーについても同様です。きっと注意されていたのでしょうが、何を言っているのかわからないので、善し悪しの判断基準も持たないまま大人になっていきました。

ろう学校卒業後、社会に入りました。周囲の聴者は手話がわかるとは限りません。やりとりは、やむなく筆談になりますが、学力が低く、文章力がないので、その筆談の文章を見て、周りから笑われることも多かったです。また、マナーについてもきちんとやっているつもりでも、周りからはマナーがなっていないと疎まれることもありました。

そんな中我慢をして仕事を続けていました。ろう者の大人たちは似たような経験をみ

んな持っています。

そんな苦しい中で、ろう者のアイデンティティに目覚めたのは26歳のときでした。フランスのパリに油絵を学ぶため１年間留学をしました。現地のろう者と交流をしている中で、ある時、「ド・レペを知っているか」と聞かれました。ろう学校を設立した人物だということでした。それまで私は日本でろう学校に在籍していましたが、ろう者の歴史や手話、ろう学校設立の経緯などについて教わったことがなく、何も知らなかったということに初めて気付かされました。自分は、ろう学校発祥の地がパリであったことも知らずにいたのです。

近くの教会にド・レペの墓があるというので行ってみることにしました。教会内の墓地というのは珍しいのですが、たくさんのお墓が立ち並ぶ中、どれがド・レペのものか一見わかりません。しかし、一つひとつ見ていくとすぐにわかりました。というのは、他のお墓にはフランス語の文字が刻まれていますが、ド・レペのお墓だけはフランスの指文字が刻まれていたのです。

ド・レペのお墓を前にして感動を覚え、そして感謝の気持ちが起こりました。彼がろう学校を設立していなければ、ろう学校が存在していない、あるいはもっと時期が遅れていただろうと思うと自然と感謝の念がわきました。

また、ろう学校の近くにあるろう協会の事務所に行くことも勧められ、その協会で見学をさせてもらいました。その時に、ろう者が作った作品がポストカードやカレンダーになっているものが展示されてありました。そこで、「デフアート」というものだという説明を受けました。手話やろう者のアイデンティティ、歴史について描いているということを教わりました。その時には、まさか自分がデフアートを描くことになろうとは思いませんでした。１年間の留学を終え、帰国後しばらくして、やはり本格的に絵の道に進もうと決心をしました。

その後、ろう者の女性と結婚し、北海道に移住しました。そこで生まれた息子は、私と同じろう者でした。聞こえる、聞こえないということではなく、息子の誕生をとてもうれしく思いました。その一方で、不安も感じました。というのは、その地域のろう学校は、当時、口話法を採用していたからです。

３歳になったら、息子はそのろう学校で口話訓練を受けるのか、私と同じようなつらい思いをするのではないか、と思うとやるせない気持ちになりました。口話法から手話法に変えてほしい、と思いましたが自分で訴えるということもできませんでした。

その時に思い出したのが、パリで留学した時に見たデフアートです。デフアートの作品を通じて、ろう学校の先生や保護者、そして一般の人にも作品を見てもらい、交流をする中で理解を広げていけるのではないかということを強く感じました。

それまでは風景画や人物画を描いてきましたが、デフアートに転向し、いくつもの作品を作り上げました。

その後、個展を開き、まずはろう学校の先生や保護者を招待し交流を深めました。ろう学校でも口話法の限界は感じていたようですが、手話での教育を始める事には、二の足を踏んでいたようです。

しかし、私の作品を見たことをきっかけに、手話での教育に取組み始めました。丁度その頃、息子も入学の年を迎えました。ろう学校から帰ってきた息子に、「学校は楽しい、手話だからわかるよ」と言われて、とてもうれしく安堵しました。

デフアートはこれからも生涯続けていきたいと思っています。

私の作品は、ご覧いただいておわかりいただけるかと思いますが、青を基調としています。紺と青と白の３色を多く使っています。これらの色には意味があります。

紺はろう者の歴史。昔、口話が厳しかった苦難の歴史を表しています。

そして、青には２つの意味があります。空と海です。地球を覆う青い空は、どこにいても、誰にとっても同じ空です。聞こえる、聞こえない、障害のある、なし、人種にかかわらず、ひとつの青い空が地球を覆っています。そこから平等を表しています。

海は、海の中では聞こえなくても全く問題が生じません。手話で話をすることもできます。聞こえる人も、海の中では音声では話ができませんから手話を使うことになります。つまり、青い海の中では、聞こえる人も聞こえない人も対等でいられます。そのことを青で表しています。

最後、白です。純白の白は、ろう者の言語である手話、誇り、アイデンティティ、寛容、希望のある明るい未来、を表しています。これらを使って、オリジナルのアート作品を作って発信を続けています。

対等ということについて、一つの思い出があります。

私が留学していた当時、パリでも当然中学生は喫煙をしてはいけないのですが、外では吸っている生徒も多くいました。

私がパリを散歩しているとき、背の高い中学生が私に近づいてきました。何か話しかけてきたので、「耳が聞こえない」と身振りで表すと、その中学生は声で話すのをやめて、身振りで話しかけてきたのです。「ライターを持っていませんか。」、と聞かれました。「持ってないよ。すまないね。」、と言うと、最後に握手とハグを求められ別れました。その態度に感動したのです。というのは、日本ではこう言ってはなんですが、何か話しかけられて、「耳が聞こえない」と言うと、そのまま立ち去られることがほとんどです。そうされることに慣れていましたし、聴者に対して諦めの気持ちがありました。いつものことだと思うようになっていたのですが、そのパリの中学生は、声をかけた以上は、最後までコミュニケーションをとろうと、声で話すのをやめて身振りで話を続けました。

そんな経験も私の中で対等という思いとなり、作品の中で青に込めて表しています。

今後の目標は、聞こえない、音のないろう者の世界と、音のある聴者の世界、この２つは、昔は理解がなく大きくかけ離れていたものです。最近は、テレビやニュースでも手話を目にするようになり、この世界は少しずつ近づいてきています。両者を更に近づけていきたい。そのためにデフアートの作品を通して架け橋を作りたいと思っています。

理解を更に広め、この２つの世界を繋げていきたいというのが私の目標です。

ろう者の子供、大人、また、聴者の理解のためにも、更に、この活動を続けていきたいと思っています。

以上です。

○前川　ろう者と聴者が対等の世界、本当に素晴らしいですね。ありがとうございます。

【講演２】

「デフアートの社会への効果」

講師：門　秀彦

司会：前川　和美

○門　こんにちは、門と申します。僕は両親がろうあ者です。なので、コーダになります。

僕にとってデフアートというのは、先程の乗富先生がおっしゃったような、ろう者側の立場で表現するというよりは、僕はろう者の世界に半分いましたけれども、半分は聞こえる世界にいたので、丁度真ん中ですね。なので、手話表現とかろうの世界というものを半分内側から、半分外側から見ているような、そういうところに育ちましたので、独特の客観的な見え方みたいなこともあるのかなと思います。

なので、僕は、手話の魅力というのを言語であるということと、それ以外に聴者の世界、音のある世界から見たときにも、そこにアート性とか、僕から見るとポップアートのように感じることもあるし、表現自体が凄く魅力的で、顔の表情もそうですけれども、ものの伝え方、気持ちの伝え方とか、あとは相手の気持ちの読み取り方、ろう者だけではなくて聴者にとっても魅力的なものだと思いますので、そういうところを表現できたらなと思ってやっています。

だから、僕のデフアートというのは、聴者とろう者の真ん中から見た世界、そういう感じなのかなと思っています。僕がデフアートをやるきっかけになったエピソードも話していますので、それをご覧いただけたらと思います。

＊講演映像＊

○門　本日は、デフアートについてお話をしたいと思います。

僕が最初に手話の絵を描いたのは 20 歳のときでした。そのとき、僕は洋服屋で働いていましたが、絵を描いたりもしていました。

たまたま地元、長崎のアーケードの一角に壁画を描く仕事がありました。そこに横10メートルぐらいの大きな壁画を描くことになり、２週間ぐらいかけて描きました。

絵が半分ぐらいでき上がった頃に、ろう者である僕の両親が差し入れを持って見に来ました。「凄い絵になりそうだね、大きいし、この絵ができたらろうの友達と、息子の絵の前で待ち合わせするなんていうのは凄くいいな。」みたいなことをお父さんとお母さ

んが話していて、それまでは普通に、当時描いていた動物の絵とかを色々描いていましたが、ここで待ち合わせする人たちがいるんだと思って。待ち合わせする人たちの後ろに、待ち合わせしている人の絵があったら面白いなと思い、色々な人を描くようになりました。

先程の、お父さんの話にあったように、ろう者の人たちもここで待ち合わせするんだと思い、だったらろう者の人たちにだけわかるような絵を、手話の絵を描いたら面白いのではないかと考えました。ろう者の人たちも喜んでくれるんじゃないかなと思い、絵の中に急遽、手話をドーンドーンドーンと入れてみました。

「ありがとう」とか「こんにちは」みたいな、絵にしやすい手話を選んでいくつか描きました。

絵が完成して、ろう者の人たち、うちのお父さんもそうですけど、手話が絵になっているのを見て、繁華街ですから、凄く目立つ場所にドーンと手話を描いているということに、凄く驚いて喜んでくれました。

僕も喜んでくれて良かったと思っていたのですが、健聴者の人たち、手話を知らない人が見たら、単純に絵だと思って見るんだろうなと思っていました。けれど、僕の友人の洋服屋さんを経営している友人が来て、「門くん、凄い絵ができたね。特にここがかっこいいよ。」って言ったのが、その手話の部分だったんですね。あれ？手話がわかるのかな、と思ったら、「これってさぁ、ヒップホップのアレでしょ。こういうHey Yoみたいな、こういうやつを絵にしたんでしょう？」、と言われて。かっこいい、かっこいいって言うので、「これはヒップホップのそういうのじゃなくて手話なんです。言葉なんですよ。」と言いました。これは、「こんにちは」という意味だし、これは、「ありがとう」、これは、「またね」って描いています、と説明をすると、えらく感動して、これめちゃくちゃかっこいいし、しかも、言葉なんて最高じゃんみたいな話になり、このデザインで盛り上がったんですね。

そして、これはかっこいいから、是非、Ｔシャツとかにしてみたらどうだろう、と言ってくれました。手話を見てかっこいいと言われたのが、僕の中では斬新、新しい感覚

だったのですが、更に、それをＴシャツにしようというのです。

Ｔシャツっていったら、お客さんがそれを見て、買って着るわけですが、お客さんが見てどう思うんだろう、みんながみんな手話を見て、かっこいい、かわいいなんて思うのかな、と思っていたのですが、実際作ってみると、あっという間に売り切れました。

地元、長崎の繁華街を、両親と一緒に歩いていると、おしゃれな子たちが、手話のデザインのＴシャツを着ているのを時々見るようになりました。その時、うちのお父さんとお母さんは、もちろん凄く喜んでいました。

うちのお父さんとお母さん世代からいうと、手話というと、障害者、耳が聞こえない人たちの言葉だったり、見てからかわれたり、差別されたりみたいな時代だったらしいので、それを考えると、町中にドーンと手話の絵があって、その前を歩いている若い子たちが、手話のデザインされたＴシャツを着て堂々と歩いている。ニコニコして歩いているっていうのが、凄く不思議な感じで、そういうふうにとても喜んでいました。

デフアートの持つ社会への効果というのは、見方を変える、出会い方を変える、手話に対するそれまでのどちらかといえばネガティブなイメージ、ろう者自身もそう思っていたかもしれないし、健聴者の人が描いていたようなネガティブなイメージというものは、手話自体がネガティブなのではなく、出会い方があまり良くなかったのかなと思っています。

アートとして手話に出会ったときに、それまでのネガティブなものではなく、とても色鮮やかな、ポップなアートとして、あるいは洋服屋さんで見かけるおしゃれなデザインとして手話と出会うというところで、印象が全く違ったんだろうなと思いました。なので、物事の偏見、色々偏見みたいなものはありますけど、それは、出会い方次第で全然変わってくるのかなと思います。

デフアートというのは作品の魅力だけではなく、見た人がそこから感じたこと、知れることをより偏見なくポジティブにテーマに対して出会えるという、そういうものになるのではないかなと思います。そもそも、アートというものが、どんな文化の人でもどんな年齢の人でも、みんなが絵として作品として見るので、あまり偏見なく、フラットな状態で見ることができる表現なので、まさにそういうものと手話というものがうまく結びついて、手話だけではなく、ろう者、ろう者文化とかもアートとして社会に発表することで、色々な偏見とかを、誤解とか、差別とかをドーンと飛び越えて、人の心に届くのではないかなというふうに思います。

○前川　門先生、ありがとうございました。

今、先生のご講演を聞いて、手話のデフアートとの出会いのきっかけということについて伺うことができました。

ありがとうございました。

【講演３】

「絵画における表象」

講師：田中　久美子

司会：前川　和美

○田中　こんにちは。本日は、お招きありがとうございます。

私は、デフアートに関して全く何も知らなかったわけですが、今回、このお話をいただきまして、そして、乗富先生、門先生の作品を拝見して、デフアートについて理解できるようになりました。

まさに、今、お二人の先生にお話ししていただいたアートがデフアートとの架け橋になったということだろうと思います。その先生方のアートを通じて、そのろう者のアイデンティティ、あるいは誇り、あるいは長い苦しみの歴史、そういうことも学ぶことができました。

私のお話は、デフアートに特化することはできませんけれども、こういう何も知らなかった私が、そういうデフアートについて理解することができたのはアートの力だろうというふうに思っております。

今回のお話は、アートが持っている力というもの、それが平等に様々な人がそこでコミュニケーションができる場がアートであるという観点から、お話がうまく伝わるかどうかわかりませんけれども、できればというふうに思っております。

よろしくお願いします。

＊講演映像＊

○田中　このシンポジウムで、絵画における表象というテーマでお話しするように依頼されました。正直に申し上げると、私はデフアートについて何も知りませんでした。そこで、慌てて、デフアートとはどういうものなのか、定義は何なのか、探り始めました。また、本日、登壇なさっている乗富さん、門さんの絵画も拝見しました。

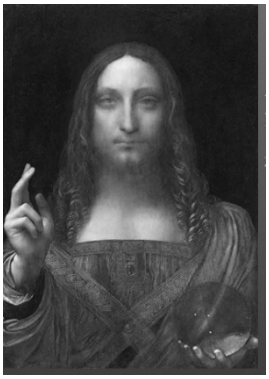
デフアートとは、ろう者の歴史や文化を背景としながら、ろう者が自らの経験や苦闘や喜びを表出し、ろう者のアイデンティティを表象する絵画にほかならないのだと感じました。お二人がテーマになさっているのは、手の表象、手話の表象です。

手話に対する誇りや喜びが伝わってきます。

手話とは、メッセージが託されたコミュニケーションの手段です。絵画も同様に、イメージに意味を託し、託されたメッセージを読み解くコミュニケーションの手段ともなり得ます。その場合、絵画を視覚言語とも言い換えることができます。

身振りや描き込まれた事物に、作り手にも見る側にも共有される意味が隠されているからこそ、メッセージを読むことができるのです。手や腕は、メッセージを放つモチーフとして絵画の中で重要な役割を果たしています。そうした例をお見せします。

ご一緒に託された意味を読み解いていきましょう。

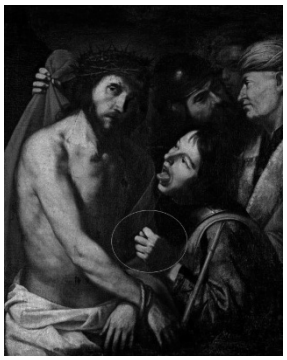


2019年、オークションで、500億円で落札され話題になった、レオナルド・ダ・ヴィンチによる《サルバトール・ムンディ（世界の救世主)》(右図)です。親指と人差し指と中指を立てて、薬指と小指は折り曲げ、手のひらを前に向けるというのは、ローマカトリックの祝福の仕草です。

ここでは、年老いた夫が美しい若妻の胸に手を置き、いかにも好色な老人といった目つきをしています（ヤン・マサイス《不釣り合いな二人》左図)。妻は夫の頬を優しくなでていますが、金持ちの未亡人になる日を待ちわびているようにも見えます。

この作品を雄弁に物語る仕草が、２人の後ろの意味深な笑いを浮かべている女中の姿です。親指の先端を人差し指と中指の間から突き出す仕草は、イチジクの仕草と呼ばれて、極めて性的な意味を担った侮辱的なメッセージを放っています。

一方でキリストを嘲笑する人物にも同じ仕草が見られます（フセペ・デ・リベーラ《キリストの嘲笑》右図)。キリストに対して軽蔑を込めて、クソくらえとでも言っているようです。



拳を振り上げる仕草は、威嚇の表象とされます。

ミロの作品では、振り上げた拳がひときわ大きく目を引きますが、フランコ率いるファシズム政党と争って、内戦の最中にあった共和党を支持するポスターです（ホアン・ミロ《スペインを救え》左図）。共和党式挨拶を借用し、握り締めた拳を上げる姿を描き断固とした意志と社会的な抗議を表しています。

アメリカのストリートアートです（ネザー《必要最低限のための戦い》右図）。指を十字に交差させるのは、幸運を祈るという印です。この廃ビルに描かれた黒人は、自分にはもう少し運が必要だと主張しているかのような悲哀を感じさせます。

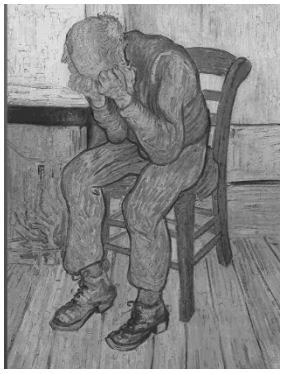
色々な愚か者たちが大勢集まって騒いでいます（ピーテル・ブリューゲル《愚者の祭》右図）。手前中央の道化が、鼻に親指を当てる仕草に注目しましょう。この仕草の由来も数々の説がありますが、軽い気持ちで相手に失礼な態度をとって、侮蔑を表す仕草として、ヨーロッパで広く知られています。

日本にも目を向けてみましょう。この歌舞伎役者を描いた浮世絵では、中央に指を大きく開いて、全ての指に力を入れた人物が描かれています（豊原国周《歌舞伎俳優を描いた浮世絵》左図）。このつかみかかる手は、次に相手の喉を締め付けて窒息させる行為が続くことを示唆しています。怒りや復讐心を表しているとされます。

さて、両手を上げたポーズですが、死せるキリストを前に、赤い衣をまとったマグダラのマリアは、激しい悲しみと深い痛みを表します（アンニーバレ・カラッチ《ピエタ》右図）。

一方、ゴヤの、侵攻したナポレオン軍を前に銃殺されようとする、スペインの人々の悲惨な様子を表した衝撃的な作品ですが、銃口を向けられ両手を高く上げた男は、降参だと言っているのです（フランシスコ・デ・ゴヤ《マドリード、1808年５月３日》左図）。彼の足元には、殺された仲間の遺体が転がっており、次は自分の番だとわかっているのです。

両手を上げるポーズが降参を意味するのは、広く認知されています。手を挙げているのは黒人の男性でしょうか（ジャン＝ミッシェル・バスキア《無題》右図）。撃つな、降伏すると伝えているのです。この作品は、丸腰の黒人が白人警官によって射殺された、昨今のアメリカの事件を想起させます。



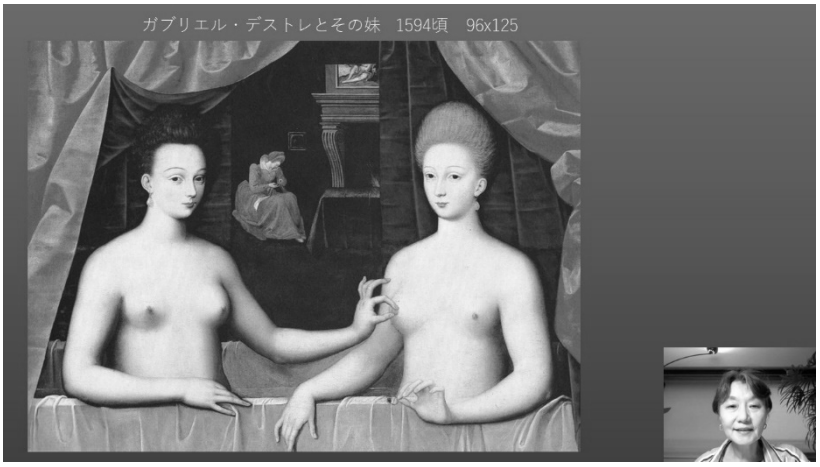
一方、ゴッホが描く男性は、悲しみや絶望を表しています（フィンセント・ファン・ゴッホ《悲しむ老人》左図）。顔を覆うポーズは、遮断の仕草です。ストレスを抱えるとき、それを締め出すために、世間から距離を置くために、こうした行動を行うと考えられています。

逆に腕を隠すことでメッセージを放つこともあります。ナポレオンには、こうしたポーズの肖像画が複数あります（ジャック・ルイ・ダヴィッド《書斎のナポレオン》右図）。18世紀には、ポーズをとるとき、右手を隠した方が堂々とすると考えられ、正しい作法と認識されていたようです。また、利き腕を隠していることから、相手に対して悪意も攻撃の意思もないことを伝えると同時に、いかなる危険が及ぶことも心配しておらず、断固とした指導者であることを示すポーズでもあったようです。

これらの作品では手や腕が、明確なメッセージを放っていました。個々のモチーフが習慣的な意味を持ち、見る者に共有されているからこそ、私たちは、即座にその意味を理解することができるのです。

しかし、こうした情報の送り手と受け手とが共有する約束事を超え、特定な文化や社会において、イメージが重層的な意味や象徴的な価値を語りだす場合もあります。その難解なメッセージを、作品が描かれた当時の宗教的思想や哲学、流行っていた文学や風俗、戦争や疫病などの社会的、歴史的事件との関連において探り、その芸術作品がなぜ描かれたのか、そして、何を語ろうとしているのか、芸術作品の創造の理由や意味を読み解く方法もあります。こうした方法をイコノロジー、つまり図像解釈学と呼んでいます。

例を見てみましょう。瓜二つの２人の女性が、湯浴みをしている場面です（《ガブリエル・デストレとその妹》左図）。２人とも顔は表情を隠し、のっぺりとした肌を見せています。動きのない２人の女性の肉体とは対照的に、彼女たちの腕の動きは雄弁です。１人の女性がもう一人の女性の乳首をつまみ、その女性は指輪を差し出しています。金髪の女性は、アンリ４世の寵姫ガブリエル・デストレで、乳首をつまんでいるのが、ガブリエルの妹、ビヤール公爵夫人とさ



れています。16世紀の貴族社会にあって、湯浴みとは、香湯、ミルク湯、ワイン湯に浸かり、髪を染め、体を白く塗り、紅をさし、体を磨き上げる化粧の一種でした。とは言え、いわくありげで謎めいた場面です。赤いカーテンがめくられて、そこに隠された秘め事を、私達は覗き見しているような気さえしてきます。

この場面を読み解く鍵は、手の仕草です。指輪を親指と人差し指でつまみ、中指を優しく添えています。この手の仕草は、当時の身支度に余念のない女たちのお決まりのポーズでした。女は数ある宝石の中から、決まって指輪を選び、同じ仕草で掲げています(《化粧する貴婦人》右図)。

この仕草は、当時の人々には特別の意味があったようです。

この詩集(右図)の表紙の版画には、「手は信仰をつかむ(Main tien la Foy)」と言葉が添えられています。また、ここ(右図)では、月と太陽になぞらえられた国王夫妻が、指輪に囲まれ、指輪は愛と不屈の美徳の象徴と書かれています(ガブリエル・シメオーニ《ナヴァールの国王夫妻のエンブレム》)。指輪は信仰に裏付けられた、変わることのない忠誠を誓う、愛の象徴なのです。

そうした特別の愛の意味のある指輪ですが、実は、ここではサファイアの指輪です。サファイアの指輪は、アンリ４世が戴冠式につけていたもので、その指輪をガブリエルに贈り、彼女を正式に王妃に迎えようという王の意図を暗示しています。乳首をつまむ身振りは、ガブリエルの懐妊を暗示すると解されています。

実際、正妻に子のなかった王は、彼女との間にすでに３人の子を持ち、この作品が描かれた頃、ガブリエルは４人目を身ごもっていました。指輪をつかむかのように、乳首をつまむ指は、王妃の座を約束するサファイアの指輪をつかむ手の直線上にあって、乳首という赤い宝石をつけた指輪のようにも見えます。丁度２つの指輪が左右逆転して、同じ軸線上に対置されているかのようです。ガブリエルは、王妃の座を約束する王に、

子を約束しているのです。そのように見ると、背景に描かれた室内風景も深い意味を帯びてきます。

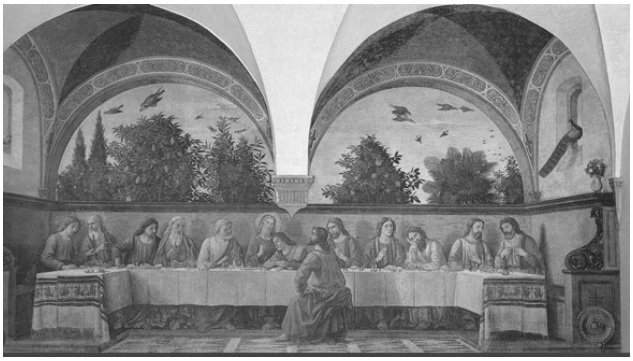
侍女が編んでいるのは産着なのです。暖炉の上に掲げられた絵画は、ガブリエルと王とのエロティックな関係を示唆しています。

手の動きをきっかけに、混沌とした時代を背景に、宮廷の愛の姿や子孫繁栄に対する、王家の熱い思いが浮かび上がってきます。

ところで、2018年に『名画で学ぶ主婦業』という書籍の監修をしました。Twitterで発信された名画に込めた主婦たちの思いを集めたものです。名画が発するメッセージにはお構いなく、主婦たちの怒りや不満を名画に託したのです。思わぬ反響を呼びました。

例えば、先程お見せした祝福の合図をするキリスト（レオナルド・ダ・ヴィンチ《サルバトール・ムンディ（世界の救世主）》）ですが、主婦たちのつぶやきは、「お母さんがどうして怒っているかわかる？」。祝福の手は、お母さんが子供に諭している仕草に読み替えられてしまいました。

レオナルド・ダ・ヴィンチ
《最後の晩餐》1495－97年　フレスコ　420×910cm
ミラノ　サンタ・マリア・デッレ・グラーツィエ聖堂



もう１点、レオナルド・ダ・ヴィンチの名作、《最後の晩餐》（左上図）です。キリストがこの中にいる１人、ユダから裏切られることを予言した瞬間です。驚きとざわめきが伝わってきませんか。

それ以前の《最後の晩餐》（ドメニコ・ギルランダイオ、1480年作、右上図）と比べてみましょう。使途たちの身振りは控えめです。レオナルドは、12人の使途たちの身振りと手振りに強い心の動揺を託しました。レオナルドは、人間の内なる思いは、身体の各部位の身振りと動きによって表現されなくてはならないと語っています。

この雄弁な《最後の晩餐》を主婦は、「旦那が連れてきた親戚たちのどんちゃん騒ぎ」に読み替え、嘆きと怒りを込めてつぶやきます(右図)。

レオナルドが従来の最後の晩餐図を革新し、内なる思いを託した身振りを敏感に感じ取っての主婦のつぶやきです。その鋭い感性に脱帽しました。レオナルドの意思とは裏腹に、鑑賞者は、鑑賞者なりに作品に自らの思いを重ねて読み取ったのです。

アートの果たす役割は多様です。画家は造形の中にメッセージを託し、見る者は時にそのメッセージを読み解き、また時に、見る者の想像力をとおして、新たなメッセージが生まれていく。アートは豊かで、多様な創造力に満ちたコミュニケーションの場でもあるのです。

ありがとうございました。

参考文献/画像典拠

○手の身振りについて：

デズモンド・モリス、『アートにみる身ぶりとしぐさの文化史』、伊達淳訳、三省堂、2019

○《ガブリエル・デストレとその妹》について：

田中久美子『フォンテーヌブローの饗宴-イタリア・マニエリスムからフランス美術の官能世界へ』ありな書房、2017

○《最後の晩餐》の主婦のつぶやきについて：

田中久美子『名画で学ぶ主婦業』宝島社、一巻：2018、二巻：2019

【座談会】

講師：乗富　秀人

門　　秀彦

田中　久美子

モデレーター：塚田　幸光

（座談会の模様）

○塚田　関西学院大学の塚田と申します。よろしくお願いします。

乗富先生、門先生、田中先生、よろしくお願いします。

まず、お三方のVTRを見せていただいて色々考えるところ、思うところがあるのですが、実は私、乗富先生と同世代ということで、まず、最初に質問したいと思います。乗富先生の作品は、暗闇の中に光があるような作品になっていますよね。一方、門先生の作品もとてもポップで明るいです。

僕も色々調べたのですが、デフアートのアメリカでの成り立ちみたいなものを見ていると、作品がとても暗いですよね。例えば、ベティ・ミラーの作品を見ると、とても政治的で暗い。それに対して、お二人の作品はとても明るくて希望に満ちていると思います。それはなぜか、まずそのあたりから議論をスタートしたいと思います。

まず、乗富先生お願いできますか。

○乗富　アメリカもそうだと思うのですが、フランスの場合にも、デフアートのポストカードを見ると、やはり暗いんですね。内容もアメリカのものと似ています。

私が初めて見たポストカードの作品は、手首のところから血が出ていて、そして嘆き悲しんでいるといった絵が多かったです。

私は、それを見て、訴えたい気持ちというのは凄くわかります。けれども、それをそのまま自分がそういうふうに書いてしまうと、一般の人への理解が難しいのではないかなと思いました。

それで、自分なりに、私のオリジナルのアートとして、明るい作品を目指して、これまで作品をつくってきました。

でも、昔のろう教育の問題、例えば、ろう教育が非常に厳しかったといった影響が私自身もあるので、心の中から出るものは、暗い部分もやはりあると思います。もちろん、明るい部分もあって、両方それぞれあるのではないかと思います。

○塚田　門先生はいかがですか。

○門　僕は、ろうの方たちの昔のそういうつらい過去とか経験みたいなことから入ったのではなくて、僕の両親はとてもオープンな性格だったので、僕の同級生、健聴者の同級生が家に遊びに来るのですが、手話やジェスチャーや筆談とか、体全体で会話をして、途中から通訳しなくてもほぼ通じ合っているみたいな、そういうコミュニケーションをたくさん見てきたので、僕の中では、うちのお父さんお母さんの、手話、ろう者の表現というのは、何か凄いなというのがあり、僕自身はあまりしゃべるのが得意ではなかったのですが、お父さんお母さんは、しゃべらないのにどんどん気持ちを通じ合わせていくみたいなところがありました。

そういう光景をたくさん見ていたので、僕の中から手話というのは、そもそも何か、エネルギッシュというか迫力のある、伝える力の強い、そういう表現だと思っていたので、あえてポップにしたとかではなくて、僕の印象は、最初から色彩豊かな、表現豊かなポップなものだったんですね。そんな感じです。

○塚田　世界のデフアートを、この期間、色々見たのですが、やはり、お二人のポジションって意外と面白くて、今おっしゃってくれたように、非常に内面的な部分から明るい方向というか、この社会に開いていこうというふうに見えるんですね。

でも、デフアートの歴史を見ていくと、どうも社会に対する戦いだとか、抵抗だというふうな、非常に強い負のイメージを感じるんですよ。

そのあたりが、多分お二人との違いなのかなと、個人的には印象を受けました。あたっていますでしょうか。

○乗富　はい、そうです。

○塚田　ありがとうございます。

○乗富　でも、そのように塚田先生が我々を見てくれるというのは、非常にうれしく思いました。

○塚田　ありがとうございます。

次に、質問みたいになりますが、田中先生も、多分、絵画の専門家としてお二人の絵画について、色々な視点というか、過去の歴史とコンテクストを踏まえて、お考えがあると思います。その辺をお聞かせいただけますか。

○田中　まず、私は門先生のアートに対しては、希望を感じましたけど、苦闘や苦しみも感じました。それから、敬意というか、初めて、私は手話というものが、言葉よりも大切に思っている宝物のような自負を感じているというのが、門先生もそうだし、それから乗富先生、それからデフアートの方々の作品を見て感じたというのがあります。

それから、門先生のアートは本当に、今度はデフアートを超えて、もっと絵画がしゃべる。要するに絵画の意味を伝えるものと、視覚的なリズムや色や、それで感性に訴えてくるという、そういう役割もあると思います。むしろ、今度手話を離れた、パワーというかエネルギーを感じました。スターバックスの前でしゃべっている私たちに、「もっと話せ、話せ」と、一緒に語りかけるような賑やかさというか、それを感じたということがありまして、本日の私の話、うまく伝えられなかったと思いますが、絵画のアートが持っているというのは、そういう表象の力というか、色や形で私たちを幸福にするという、一つの役割と同時に、今度は意味を込めてメッセージを伝えるという、そういう役割もまた別にあって、また、読み手はどう感じてもいいのかなと思いました。

それをどう読むかは、また読む人がどう感じるかというか、本当に三者というか、絵画と作り手が語り合う場なんだなということを感じたということをお話ししたかったというのがあります。

○塚田　熱を込めたコメントありがとうございます。

あと、僕も門先生に質問したかったのは、このポップな感じが、キース・ヘリングの絵画に意外と共通性があるのかなと思ったんですね。

キース・ヘリングは、30代で亡くなっていて、彼はLGBTだったわけですが、セクシャルマイノリティの人が非常にデフアートに近い、つまり、色々なカラフルな色を使いながら、人間が多種多様で、色々な行動をして、ジェンダーなり、セクシャリティといった部分があるんだということを示しながら、そういうポップなものを作っていった。でも、一向に彼だけは暗くないんですよね。とても明るくて、前向きな絵画をつくってい

る。

もしかして、キース・ヘリングの影響は受けられているのでしょうか。

○門　受けているかもしれないですね、特に、影響という自覚はしていないのですが、やはり10代、20代の頃はそういうポップアートが好きで、バスキアとかキース・ヘリングとかたくさん見ていたので、知らず知らずに影響を受けていたかもしれませんね。よく言われます。

○塚田　キース・ヘリングは手でこういうもの（片手人差し指と中指を交差させ十字をつくる）とかもありますよね。

○門　ありますね。

○塚田　キース・ヘリングは、そんなに手は強調していないと思うんです。その中で手の部分を強調しているのが、門先生の面白いところだと思いますが、手を組み合わせることが面白いんだってことにいつ頃気付かれましたか。

○門　これも、僕は普通に、あまり意識せずに描いていたんです。

門君の絵って手が大きいとか、手が何か、鳥の羽のようだとか、人の手とか足とか顔とか、全部が手を広げた、羽を広げた鳥のように見えるみたいなことを人から言われました。何かそういうふうに言われてから、人が表現するときの手の動きとか、そういうものを自然と強調して描いているのかなと言われて気づいたという感じです。

○塚田　なるほど。

乗富先生に質問します。

乗富先生の作品では、門先生と違っていて、青を基調とされていますよね。その青で描いていこうと思われたのはいつ頃からですか。

○乗富　小さいときから、心の中で持ち続けていた色とかイメージが青でした。

そしてそれを最初に表に出したのが、フランスのデフアートを見てからで、そこから少しずつ青を使い始めました。そのあと息子が生まれて、自然に、その気持ちをオープンにするということが、非常に強く作品に現れてきたと思います。

いつからというよりも、経験の積み重ねで、ある一定の積み重ねができたところでそれがはっきり出たというふうに考えられると思います。

○塚田　なるほど僕は映画研究をしているので、青という色には凄く思い入れがありまして、例えば、日本のビートたけし、北野武の初期作品に、「あの夏、一番静かな海」という作品があります。

○乗富　知っています。見ました。

○塚田　北野武の映画では、基本的には青が基調で、主人公はろう者です。

○乗富　私もあまりそこまで気付いていませんでしたが、(青については) 言われてみればそうですね。

○塚田　かつ、彼の映画全体を見ても、ほとんど台詞がありません。

つまり、北野武という人物は、コメディアンで凄くしゃべる人なのに、彼の撮る映画はほとんどしゃべらないんです。コミュニケーションが切れているという形を取るんですね。その中でブルーが基調となっている、青という色が人の感情に与えるメカニズムみたいなものがあると思うんですよ。

僕は、普通に聴者なのでわからないのですが、ろう者の方々から見て、青に対する感情というかイメージというのは、やはり聴者と違うのかなと思うんですね。

なぜかわからないのですが、北野武はそれを知っている気がしてならないのです。そのあたりどう思われますか？

少し質問が曖昧になってしまいましたが。言葉と青の関係ですね。

○乗富　言葉の上に命がありますよね。そして、地球も命ですね。地球も生きている。

その色というのは、地球の色というのは紺とか青とか白というものに囲まれていますね。ですので、自分が生きている言語、自分が生きているとか、手話だとか言語だとか、そういったものに、青は関係しているのではないでしょうか。その気持ちが自分の作品に出ているように思います。

○塚田　なるほど。赤とは違うのでしょうか。

例えば、門先生のアートにも、赤がそれほど多くないですよね。

○門　そうですね。僕は、実は色弱なんですよ。なので、学生時代には「門は色弱だから絵とかアートの仕事にはつけないよ」と、今はわからないですけど、当時はそのように言われました。

なので、それまでも色はつけていたのですが、そこから急に、何か、色に対するコンプレックスというか、僕の使っている色使いは人から見たら、少しおかしいのではないだろうかと思うようになり、それでモノクロで描くようになっていったという、そういうこともありました。

それが僕が色をつけて書き出したときは、「この絵を描いたのは日本人じゃない」とよく言われたんですね。

なので、僕の中では、色はみんなとの共通認識という意識はあまりないです。例えば、青。青で描けばみんなこんなふうに思ってくれる、というのはあまりないです。なので気にせず、自分の中では、凄く悲しい青もあるけど、清らかな青もあるし、熱い赤もあれば、ちょっと血のようなそういう生々しい赤もある。なので、そのときのひらめきだけで、色使いというのは決めていますね。

○塚田　なるほど、面白いです。やはり少し理由があるんだろうなと思っていました。

僕、片目を中学校の頃、１回失明しているので、見える部分に関しては何となく気になってしまうんですよ。

なぜ青なのかとか、なぜ赤なのかとか、なぜそれを使わないのか、という部分に惹かれるというか、気になってしまうんですね。なので、変な質問を色々とすみません。

次に田中先生に質問します。例えば、この70年代、80年代にベティ・ミラーというデフアートの先駆者、女性がいると思いますが、同じ時代にベティー・フリーダンというフェミニズムの先駆けの人がいたと思うんですね。

２人のベティーが、70年代、80年代にデフアートなりフェミニズムを牽引（けんいん）していったと思います。政治と美術の関係について、田中先生はどう思われていますか。

○田中　政治と美術ですか。

やはりメッセージを託すという意味で、絵画は一つの手段だと思っています。

○塚田　難しい質問ですみません。

というのも、丁度、16世紀、17世紀の絵画の説明をされていたと思いますが、絵画の向こうには必ずコンテクストで政治的なものがありますよね。そう考えたときに、この70年代にこういったデフアートが出てきた背景というのと、政治的なものというのは、やはりフェミニズムの影響は強いと思いますか？

○田中　それについては、今初めて先生から質問がきたもので、すぐに答えられないので、逆に先生のご意見を伺いたいのですが。

○塚田　僕がフェミニズムを語るのもどうかなと思うのですが、簡単な背景でいうと、1960年代に公民権運動があって、70年代にフェミニズム運動に連動していきますよね。その中で、やはりマイノリティの権利擁護みたいなのがあると思うんです。

それが、例えば、デフアートのような、いわゆる、マイノリティのアートに繋がったのかなと思うのですが、それについて田中先生はどう思いますか。

○田中　といいますか、フェミニズムから繋がってきたというよりも、そのマイノリティ

を絵画は受けいれる度量があるというか。そして、発表の場というか、そういう気は凄くしていて。本日見せていただいた、例えば、乗富先生などは、そのマイノリティの主張、それをニュートラルに絵画の中で語っていけるということで、凄く政治的なもの、常に政治的なものをバックに置きながら絵画というのはある、というのが一面だと思います。ただ、それをどう読んでいくかという、読み方が凄く難しい。

何と言うか、自由に読んでいいのかというのは少しあって、読もうとしなければいけないという絵画の一つの読み方ともう一つ、それを読む人が自由に読み解けないかもしれない、あるいは、自由な形で解釈してくれるという難しさと可能性、それは常にあって、その時代の中で、いつも一番マイノリティが持っているものが変わっていくのが、時代を流れていくと、何がマイノリティであったか、誰が苦しんでいったかとか、そういう形が常に背景にはあるという気はします。

それが、フェミニズムだと言われればそうなのかなという気はしますし、一つの面白い課題だと思います。

○塚田　ありがとうございます。　あと、少し気になった点がありまして、例えば、ハンドサインでいうと、例えば、アメリカで「アイスクリームがおいしいね」と言うときは、このようにグッドサイン（親指を立てるしぐさ）をしますよね。

イタリアでおいしいものを食べても、ボーノってグッドサインをしますね。

ですが、例えばこのグッドサインは、イランとかだと、「これはもうまずい、お前は最低だ」、という意味になりますよね。

例えば、乗富先生は留学されていたのでわかると思いますが、フランスには500万人のイスラム教徒がいますよね。なので、このグッドサインを簡単には使えない気がするんです。そういったものが、手を描くデフアートにはやはりつきまとっている、関連しているのではないかという気がします。

そのあたりは乗富先生、どうお考えですか。

○乗富　手話というのは世界共通ではないと言われる通り、日本の手話では問題なくても、海外の手話ではマナー違反に見えてしまうこともあります。

私の場合は、自分のオリジナルとして、手の表象、手の形というのを、このままではなくて、少し形を変えて描いているんですね。私がオリジナルで描いている手の形の中に、私個人の気持ちを込めて描いているつもりです。

○塚田　少し変えていらっしゃるということですね。

○乗富　はい、そうですね。

本当は指の輪郭もはっきりと描きたい気持ちはあるのですが、先ほど塚田先生がおっしゃられたように親指を立てるサインの持つ意味が国によって違うのでこの問題を私なりにどういうふうに解決したらいいのかを考えて、指の輪郭をはっきりとは表さず、四角い表象にするという形でいこうという書き方を考えました。

○塚田　ありがとうございます。

門先生にも質問ですが、門先生のアートには、ピースサインみたいなものが多いですよね。門先生はどうされていますか？

いわゆるカルチュラルサインというか、ハンドサインの違いについてはどのように考えていますか。

○門　いや、僕は気にしていないですね。

言葉は色々違うし、例えば、ポップアートなので文字が入る場合もあるのですが、これは特定の手話ですよ、みたいなときは、ジャパニーズサインランゲージみたいな文字を入れる場合もあるし、ろう者を描くときというのは、その人がそういうふうに動いているので、そのまま描くというだけです。

例えば、日本人はお辞儀をしますけど、海外に行けば「みんな、やあ」、みたいなあいさつで、お辞儀はしないですよね。でも、僕は日本の手話は凄くきれいだと思うので、そのまま描く。何か誤解を招こうとか、何か含みを持たせて描く場合は、気をつけるかもしれませんが、そのまま描いているものに関しては、そのまま描くという感じです。

○塚田　ピースサインって、アメリカにいるときはいつも注意しています。というのも、ピースサインの向きが反対になった瞬間に卑猥な意味になるので。というふうに、実は、位置が変わるだけで、意味が変わるというものがあるので、どうもハンドサインというのは難しいな、という印象が凄くあるんですね。

それは、あまり考えずにされているという感じですね。

○門　例えば、これがハンドサインを描いていますという場合は、気をつけるかもしれないですね。

○塚田　なるほど。

○門　ただ、本当に、ピースサインをしている人を描く場合は、そのまま描きます。

卑猥な意図ではないよということであれば、そのまま描きますね。

○塚田　なるほど。では、そろそろ質疑応答にしましょう。順番に、上から読ませてもら

います。

「貴重なお話をありがとうございました。ろう者は絵が上手な方が多いと感じますが、聴者と比べて脳の使い方が異なる部分もあるのでしょうか。言語を司る部分より、映像を司る部分を多く活用しているとか」、という質問があります。

いかがでしょうか。これは、乗富先生、門先生にお聞きします。

○乗富　ろう者の場合は、空想をする癖があります。

人に囲まれて話が通じないとき、例えば、自分の家族がみんな聞こえて、自分一人だけろうという人が多いんですね。

そういうとき、自分の中で空想をしたり、色々なものを想像してつくることを得意とするろう者は多いです。私もそのうちの一人です。それが絵に繋がっているかどうかは別ですが、もちろん、そういうことで絵が得意な人、苦手な人がいると思います。

また、写真を撮るのが得意だという人もいます。

つまり、ろう者はおっしゃるように想像力が巧みな人が多いと思いますので、どちらかというと、おそらく、聴者と比べるとそういったところが得意な部分が多いのかなと、優れているのかなと思います。

また、コーダについてもそのろう者に含まれるのではないでしょうか。視覚で情報を得ることが得意だとか、そういったことは、コーダにも言えるかもしれません。

○塚田　なるほど。門先生、コーダとしてはどうですか。

○門　おっしゃるように、得意な人もいれば、そうではない人もいると思いますが、僕が子供のときにお父さんのろう者の友達が家に遊びに来て、僕はまだ小学校に上がるか、上がらないかぐらいのときでしたが、両親は、家で仕立屋の職人をしていましたので、ミシンとかはさみを使ったり、アイロンをかけたりしているときは、仕事をしながらしゃべれません。なので、ろうの友達は、お父さんの手が空くのを待っていなくてはいけないんですね。

その間僕と遊ぶのですが、子供の扱いが苦手なのか、速い手話が小さいときの僕はわからなかったので、うまく手話で遊ぶということができなかったんです。僕が落書きして遊んでいると、そこに絵を書き足してくれて、そのおじさんが、特に絵が上手だったのかもしれないのですが、よく手話を使わずに絵で会話するみたいな、絵で遊ぶというようなのもよくやっていました。

それを凄く僕は印象に残っていて、今、僕が子供とするワークショップも、それをや

っているんですね。

なので、ろう者の人と絵で会話するというのは、子供のときから強く印象にありますね。

○塚田　ありがとうございます。

次が、聴者の方ですね。

「乗富先生、門先生のアートからは、どのようなメッセージが隠されているか、田中先生の見え方を教えていただきたいです。」いかがでしょうか。

○田中　先程の座談会のときに少し話題になりましたけれども、言葉そのものが読み取れるかとか、手のサイン自体が、色々な地域で違うということも、非常に面白いと思いますが、アートにおいて、そこは限界がある部分だと思います。

それを読んでいくということは、時代を知ったり、文献をあさったり、著者の思いを悟ったりということで読んでいくことしか可能でなくて、それが時間が過ぎてしまえば、あるいは場所が違えば、読めなくなることはあると思います。それで宗教的な画像などが問題になることはあるかと思います。それは絵画の限界だと思います。

私が乗富先生や門先生の作品から読んでいくのは、今のお話を伺って、手話そのものを描いていらっしゃるのではなくて、そこの手話に託した思いとか、それを託していらっしゃる、そこを読んでいくかということになるかと思います。という形で、手話そのものを読み解くのではない。

本当に理解する場合は、手話も読み解きながらという作業が必要だと思いますけれども、そういう２つの方法というか、私なんかが読めるのは、手話そのものではなくて、その背後の気持ちであるとか、そういうことです。

○塚田　ありがとうございました。では、次の質問にいきたいと思います。

田中先生に質問がもう１つ、聴者の方から来ています。

「先程、ご紹介いただいた絵画に含まれる仕草や手の動きなどと、デフアートに表象される手型などは本質的に同じものとお考えでしょうか。それとも性質の異なるものと捉えていらっしゃいますでしょうか。私は、デフアートに手や指の形そのものが表象される場合、その意味するところは、言葉そのものであることが多い印象を持っており、いわば、絵画の中に文字が記されているのと同じような印象を受けています。」とすると、先程述べた２つのことですね。

手の動きと同じかどうかという話ですが、これは本質的に違うものではないかと感じ

ているのですが、是非ご意見をお伺いしてみたい、ということです。

先程というのは、先生が紹介した絵画に含まれる仕草や手の動きなどと、デフアートに表象される手型は違うと、この方は感じているということですね。本質的には違うものではないかと考えていると。そこで、田中先生のご意見を伺いたい、ということです。

○田中　私自身は先程お話ししたのは、２つの読み方があるとお話しして、１つは本当に手話と同じように、意味が読める手の動きを入れた、それを読み取るということがあると思います。

それは１つで、つまり、手話と同じ意味だと思います。

もう１つは意味そのものを読み解くことよりも、もっと他の意味というか、そういうことが託されたということで、読み分けなければいけないということがあるので、それを正確に読めるか、どこまで読めるかというのが一番絵画の中での危険というか、気をつけることかなという気がします。

○塚田　ありがとうございます。

乗富先生に、ろうの方から質問です。お願いします。

○質問者　ろう者と聴者の世界を近づけていく、架け橋になるというお話、大変感動しました。私も描くことが好きなので共感できました。

１つ質問なのですが、絵をお描きになるときに、絵のインスピレーションはどういうときに湧くのでしょうか。例えば、家族との会話のときなのか、どういったときに作品のインスピレーションというのは湧くのでしょうか。

○乗富　私の両親も祖父母も聴者です。聴者とろう者の世界は違います。

そこでの齟齬であったり、逆にろうの友達と手話で話をするときの楽しい気持ち、それから社会に入ってから、聴者に囲まれてのつらい思い出、話が通じないとか、そういった思い出、それからフランスに留学したときに出会ったろうの人たち、それからろうである息子の誕生、そういった経験を作品にしています。

ですので、その経験の積み重ねという、それぞれの経験が作品に繋がっています。

それだけではなくて、ろう者の歴史を学ばなくてはいけないと思います。

フランスから帰国してからやはりろうの歴史について知る必要があると思いました。もちろん、苦難の歴史もあるのですが、そういった歴史に関しても伝えていきたいという気持ちが強いです。

ですので、今ご質問された方も、様々な経験をとおして、これから培われていただけ

ればと思います。

○質問者　ありがとうございました。

○塚田　ありがとうございました。

時間も過ぎてしまいましたので、これで座談会のほうを閉じたいと思います。

先生方、ありがとうございました。

閉会の辞

平　英司

○平　皆様、ありがとうございました。今、ご紹介いただきました、平です。

本日の講演会、座談会を通して、一緒にデフアートについて学ぶことができたと思います。

ろう者の絆、手話の豊かな世界を表象するアート、そして更には、それを超えて、その豊かな世界が社会の中でどのように扱われているのかを訴えるような、そういったアート、色々なものがデフアートに含まれていることを学ぶことができました。

今後も色々なイベント等を企画していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

短いですけれども、挨拶はこれで終わりたいと思います。

ありがとうございました。

登壇者紹介

乗富　秀人（ろう画家）

門　秀彦（イラストレーター）

田中　久美子（文星芸術大学教授）

塚田　幸光（関西学院大学法学部教授）

松岡　克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター長）

前川　和美（関西学院大学手話言語研究センター研究特別任期制助教）

平　英司（関西学院大学手話言語研究センター専門技術員）

（所属、職名は開催当時のものである）

手話言語研究センター2020年度事業報告書

2021年3月3日発行

編集・発行　関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501　西宮市上ケ原一番町1-155

電話　0798-54-7013

FAX　0798-54-7014